仙台市文化財調査報告書第60集

南小泉遺跡

—倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書—

昭和58年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第60集

南小泉遺跡

—倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書—

昭和58年3月

仙台市教育委員会

序

仙台市域で埋蔵文化財に該当する包蔵地は約400ケ所に及んでいますが、その中でも、南小泉遺跡は最大の面積をもつ遺跡であります。また、考古学上古墳時代の標式遺跡としても全国的に著名な遺跡であります。

しかし、最近の各種開発事業の進展に伴って遺跡の環境は大きく変ぼうしつつあります。こうした中にあって、仙台市教育委員会が実施した事前の発掘調査の件数も年々増加しております。

本報告はそうした事業の一貫として実施された発掘調査の成果をまとめ、公開するものであります。こうした成果は市民はもとより、あらゆる研究者の共有のものとして積極的に活用されることが、文化財の普及、啓蒙に大きく貢献するものと確信しております。

今回の調査、報告にあたり、多くの方々の御助言、御協力をいただきましたこと、ここに深く感謝を申し上げますとともに、本報告書が市民及び学兄諸氏の活用を切に念じて序といたします。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は南小泉遺跡内における、倉庫建設工事に伴う発掘調査報告書である。

2．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1：25,000仙台東南部地形図である。

3．本書の土色は「新版標準土色帳」(小山・佐藤：1970) に基づいている。

4．本書の作成にあたり、次のように分担した。

本文執筆……加藤正範（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ）　結城慎一（Ⅴ）

遺物実測、遺物トレース……結城慎一、成瀬　茂、桜田逸子、神成浩志、峰岸あや子、茂泉　満、菊地宣之、三浦秀樹、遠山克喜、管野政彦山田晃弘

遺構トレース……小林　充

遺物採拓……管野政彦

遺物復原……赤井沢千代子・赤井沢　進

遺物写真……木村浩二

編　　集……加藤正範、結城慎一、木村浩二

5．遺物トレースにおいて、その中心線が一点鎖線となっているものは、図上復元したものを表す。

6．磁北方向は、真北に対して西偏7°0′である。

本　文　目　次

Ⅰ．調査要項……1
Ⅱ．調査に至る経過……1
Ⅲ．南小泉遺跡の概要……2
Ⅳ．発見遺構と出土遺物……5
　１．竪穴住居跡……5
　２．土壙……17
　３．溝……19
　４．ピット……20
Ⅴ．弥生土器……21
Ⅵ　まとめと考察……22

図・図版目次

１図　南小泉遺跡とその周辺……3
２図　調査区位置図……4
３図　１号住居跡……6
４図　遺構配置図……7、8
５図　２号住居跡……10
６図　３号住居跡……13
７図　３号住居跡カマド……14
８図　４号住居跡……16
９図　５号住居跡……16
10図　土壙平面図・断面図……18
11図　溝断面図……21
12図　土師器(1)……24
13図　土師器(2)……25
14図　土師器(3)……26
15図　土師器(4)砥石……27
16図　弥生土器拓影(1)……28
17図　弥生土器拓影(2)……29
18図　石製品・土製品……30
図版１　調査区周辺航空写真……31
図版２　調査区風景……32
図版３　調査区遺構精査全景……32
図版４　１号住居跡土壙セクション……33
図版５　２号住居跡完掘状況……33
図版６　２号住居跡遺物出土状況……34
図版７　２号住居跡遺物出土状況……34
図版８　２号住居跡土壙完掘状況……35
図版９　２号住居跡完掘状況……35
図版10　３号住居跡カマドセクション……36
図版11　３号住居跡遺物出土状況……36
図版12　３号住居跡土壙内セクション……37
図版13　３号住居跡土壙完掘状況……37
図版14　３号住居跡支脚出土状況……38
図版15　３号住居跡完掘状況……38
図版16　４号住居跡土壙遺物出土状況……39
図版17　４号住居跡遺物出土状況……39
図版18　４号住居跡ピット・土壙セクション…40

図版19　4号住居跡完掘状況……40
図版20　5号住居跡完掘状況……41
図版21　1号土壙セクション……41
図版22　3号土壙完掘状況……42
図版23　4号土壙完掘状況……42
図版24　6号土壙完掘状況……43
図版25　8号土壙完掘状況……43
図版26　1号溝完掘状況……44
図版27　1号溝セクション……44
図版28　3号溝・4号溝完掘状況……45
図版29　調査区完掘全景……45
図版30　出土遺物（土師器）……46
図版31　出土遺物（土師器）……47
図版32　出土遺物（土師器・砥石・紡錘車）…48
図版33　出土遺物（弥生土器）……49
図版34　出土遺物（弥生土器）……49
図版35　出土遺物（弥生土器）……49
図版36　出土遺物（弥生土器）……50
図版37　出土遺物（石製模造品）……50
図版38　出土遺物（石器）……50

Ⅰ．調　査　要　項

○調査目的　倉庫建築工事に伴う事前調査

○調査対象面積　約 180平方メートル

○調査面積　約 200平方メートル

○調査期間　現地調査　昭和57年12月 6 日～12月22日（実働13日）

室内整理　昭和58年 2 月 7 日～ 3 月25日（実働30日）

○調査体制

調査主体　仙台市教育委員会、開発申請者（菅井重悦、斎藤富夫）

調査担当　仙台市教育局社会教育課文化財調査係（早坂春一・佐藤　隆・加藤正範）

調査参加者　芦野ヒデ子、吉田俊一、佐藤和子、黒滝ふくえ、兼子ミヨ子、村上まつえ、渡辺みつゑ、菅野三郎、佐々木由紀、古屋敷則雄、武藤秀哉、岩渕信博、伊藤　司、只野宗一

調査補助員　森　剛男

Ⅱ．調査に至る経過

昭和57年11月15日付けで、仙台市文化町16番 1 号・菅井重悦、仙台市南小泉字八軒小路20番地・斎藤富夫の両氏より、仙台市教育委員会に発掘届が提出された。その内容は、仙台市遠見塚西66－ 2 他三筆の約936㎡の土地に180㎡の倉庫を建築するというものであった。申請地が南小泉遺跡に位置し、工事の工法がパイル打ちを伴うものであったため、当市文化財調査係は申請者に対し、設計変更を要請し埋蔵文化財の保護に努めた。しかし、当地は地盤が軟弱で盛土内の基礎工事では、強度が弱く建造物を支えきれない、という理由から、建造物によって破壊される箇所について記録保存を目的に発掘調査を実施する方向で協議を進めた。

早速11月16日に 3 m × 3 m の試掘調査を実施した結果、土師器が多数出土し、土壙状のプランが検出された。そこで申請者と再協議し、12月 6 日より発掘調査を実施することで協議が成立した。

調査対象地は、仙台バイパスを挟んで史跡遠見塚古墳の向い側に位置し、現況は水田である。そこで、18m ×10m の調査区を設定し（最終的には 200㎡まで拡張)、トラックバックフォーによって耕作土を排土し、地山上面で遺構確認作業を行った。

Ⅲ．南小泉遺跡の概要

仙台市を概観すると、段丘および沖積平野からなっており、当遺跡は沖積平野奥部上に位置している。沖積平野は深沼層、霞ノ目層、福田町層、岩切層の４層からなり、南小泉地区一帯は霞ノ目層に当たる。この層は、現世に続く氾濫源で、内陸部の最上部を占めている。また、この層は石器、土器、古代の植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっている。

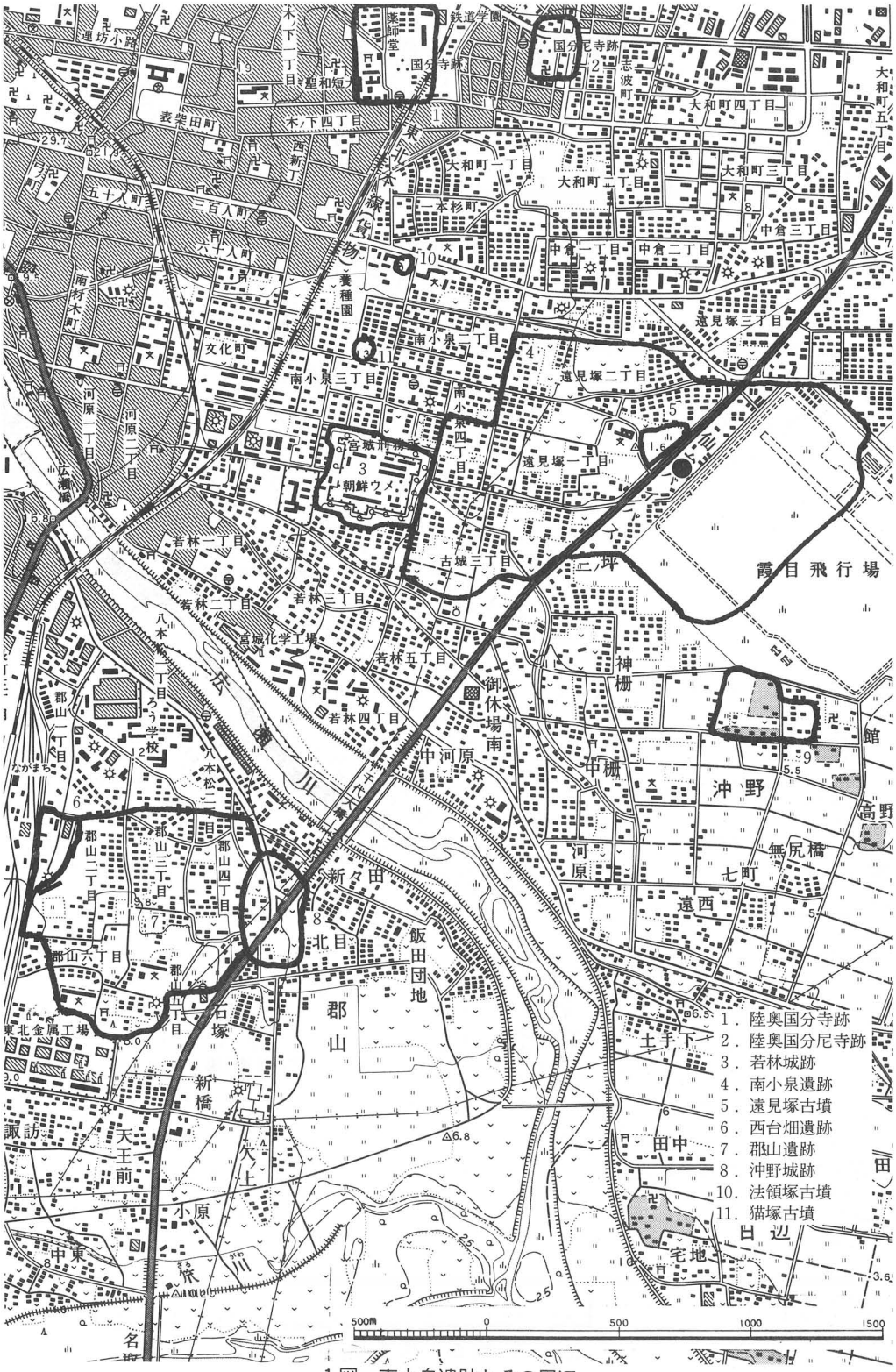
南小泉遺跡は、現在の仙台市遠見塚１・２丁目、南小泉２丁目、古城３丁目、南小泉字伊藤屋敷、字遠見塚西、字村東、字霞ノ目を含む広範囲にわたり、弥生時代から古墳時代を主とする集落跡である。

南小泉遺跡が知られるようになったのは昭和11年頃で、畑の天地返しの際に多くの土器の破片が出土し、松本源吉氏によって注目されたことによる。そして昭和14年春から昭和16年春にかけて、飛行場の拡張工事が行われ、飛行場の西側で20万㎡もの田畑の表土が土取りを受けた。この工事中に、多数の竪穴住居跡が発見され、そこから多くの土器が出土し、古代の集落跡の遺跡として注目を受けるようになった。

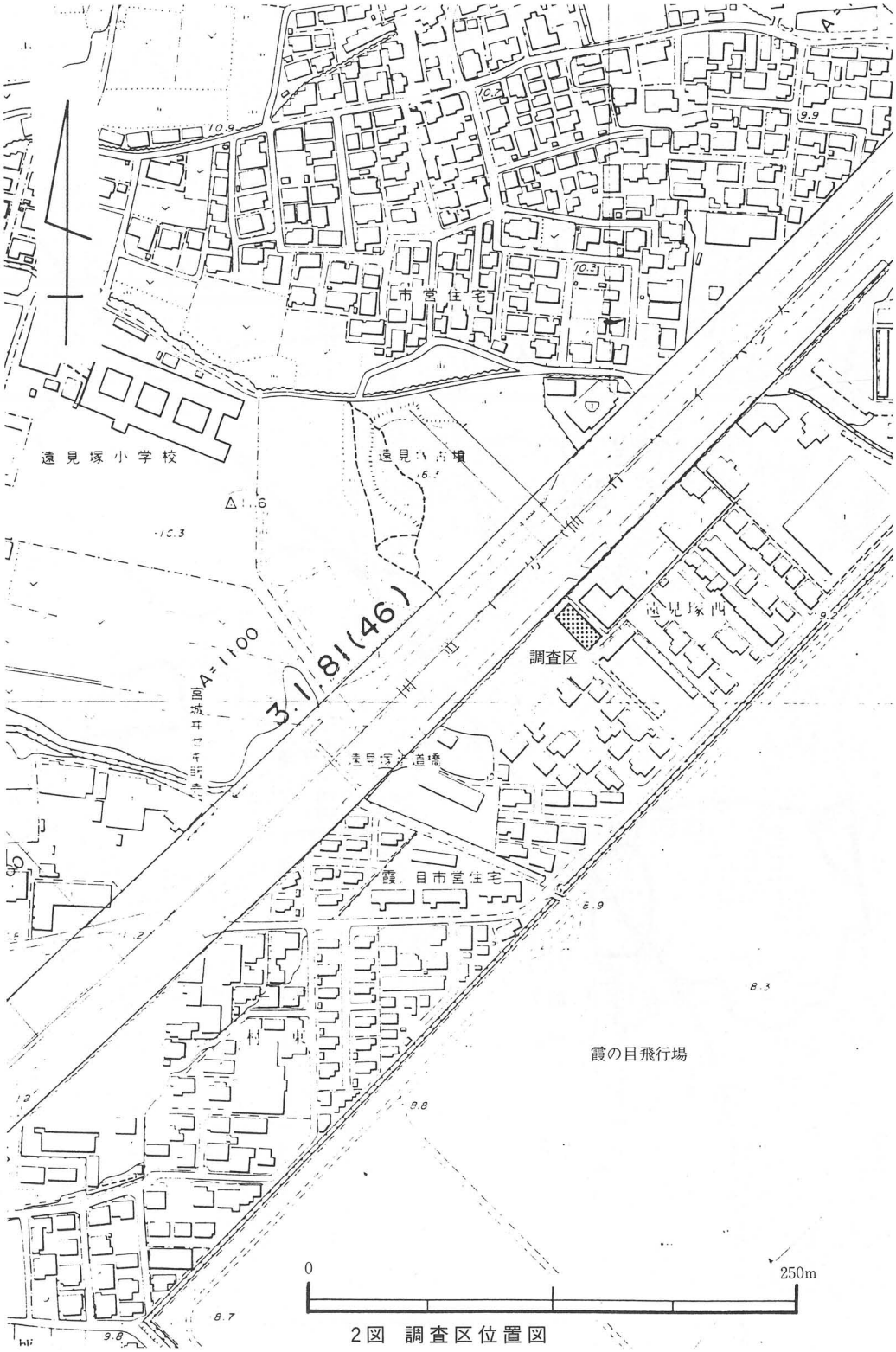
申請地周辺の調査では、(1)昭和52年度の分布調査、(2)昭和56年度の都市計画街路工事に伴う発掘調査、(3)その他試掘調査があり、多くの遺物と遺構が検出されている。しかし、付近は昭和43年の仙台バイパス開通以来、市街化が進み、申請地は農地として残っている数少ない箇所である。

周辺をながめると、南小泉周辺は遺跡の多い所で、遺跡の中心部には国指定史跡の遠見塚古墳があり、この西方には法領塚古墳、猫塚古墳、北側には国指定史跡の陸奥国分寺・陸奥国分尼寺跡がある。また、この地区には現在も「二ノ坪」「三ノ坪」の地名が残っており、古代の条里制を偲ばせている。

(1)　仙台市文化財調査報告書第13集「南小泉遺跡」－範囲確認調査報告書－　昭和53年３月
(2)　〃　第35集「南小泉遺跡」昭和57年３月
(3)　〃　第28集「年報２」昭和56年３月
〃　第41集「年報３」昭和57年３月



1図　南小泉遺跡とその周辺



2図　調査区位置図

Ⅳ．発見遺構と出土遺物

今回の調査区は水田であり、調査前まで耕作されていた所である。基本層位は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が暗褐色砂質シルト、Ⅲ層が黄褐色砂質シルトの地山となっている。Ⅱ層は調査区全体に渡って層をなしてはおらず、遺構検出はⅢ層地山上面で行った。

その結果、今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡５軒、土壙８基、溝跡４条、一本柱列１列、正、不正形のピットが27個であった。

また出土遺物には、弥生土器片620点、土師器片2225点、須恵器片３点、石器36点、石製品３点、石製模造品５点等がある。

１．竪穴住居跡

竪穴住居跡は５軒発見されており、１・２・３号住居跡については、全形をとらえることはできたが、４・５号住居路については、調査区を拡張することができなかったので、全体の規模、性格を把握することはできなかった。

１号住居跡（３図）

調査区中央で検出され、１号溝に切られている。

〔平面形・方向〕東西長約4.3m、南北長約4.2m を計る方形プランを呈し、床面積が約18㎡である。西壁で方向を計ると、磁北に対してＮ－10°－Ｗである。カマドの施設はなく、炉の存在も確認できなかった。

〔堆積土〕削平がはげしく、堆積土の最下層である砂質シルトが、周溝で約18cm、床面で約10cm堆積しているだけである。

〔壁・床面〕壁面は残存度が悪く、下端部だけが残り、立ち上がりは緩く約45°の傾斜となっている。床面は、貼り床はなくほぼ平坦であるが、水田耕作の稲株による攪乱を受けている。壁・床面とも黄褐色の砂質シルトである。北壁から南壁にかけて、幅10～20cmの周溝の痕跡が残っている。

〔柱穴〕ピットは床面で５個検出された。このうち柱穴となるのは、配列関係からＰ．１、Ｐ．２、Ｐ．３、Ｐ．４の４個と考えられる。心々距離でＰ．１－Ｐ．２、Ｐ３－Ｐ．４が220cm、Ｐ．１－Ｐ．４、Ｐ２－Ｐ．３が 230 cmを計り、ほぼ正方形の組み合わせ関係をなしている。

〔その他の遺構〕住居跡中央部・北西角・南西角・北東角から土壙が１基ずつ検出されている形状から考えると南西角の４号土壙が貯蔵穴として活用されていた可能性が強い。

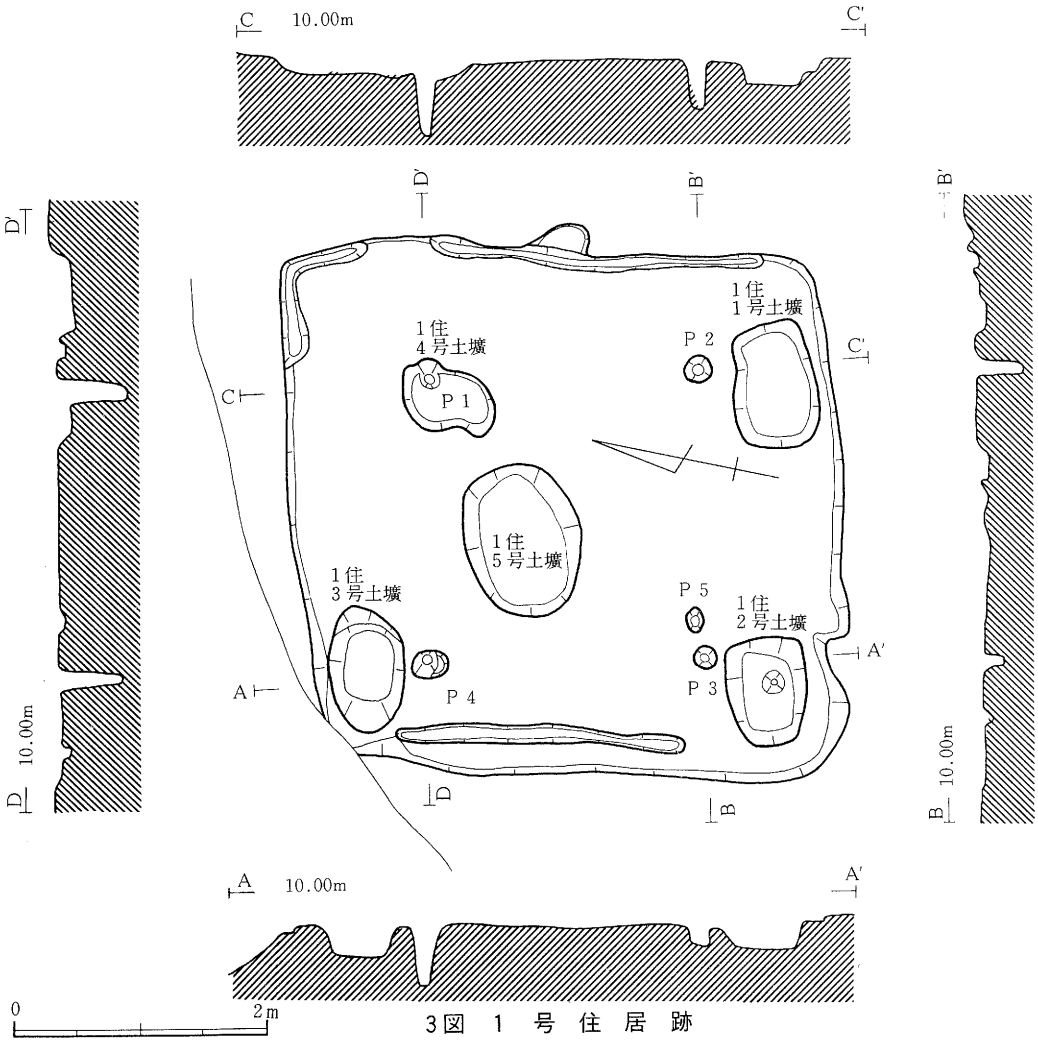
〔出土遺物〕

堆積土中より145点の土師器片等が出土し、床面からも数点の土師器片が出土したが、いずも細片で復元できる資料は少ない。復元できる資料としては、住居内1号土壙より坏が、3号土壙より鉢が、5号土壙より高坏が出土している。

高坏　(12図－14) は5号土壙より出土しており、脚部の柱状部に当たる。形状は、下部において外側にふくらむものである。調整は、外面に縦位のヘラケズリが施され、内面に縦位のナデがなされている。

鉢　(14図－3) は3号土壙より出土している。底部は平底で、底部から丸味を持って立ち上がり、そのまま口縁部に至る。最大径は体部中央にある。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面かヘラケズリ、内面が斜位のヘラナデで調整されている。

壺　(13図－3) は1号土壙より出土した。口縁部から体部にかけての破片である。体部はゆるく内弯しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部は外方に開いて最大径をもつ。外面調整は口縁部横ナデ、体部にヘラケズリが施され、内面はヘラナデによって調整されている。



3図　1　号　住　居　跡

3号溝
4号溝
8号土壙
9号土壙
2号土壙
5号土壙
5号溝
1号溝
2号溝
6号溝
1号土壙
3号住居
1号住居
4号土壙
4号住居
6号土壙
一本柱列
7号土壙
2号住居
5号溝
5号住居
3号土壙
カクラン
0
4m

4図 遺 構 配 置 図

2号住居跡（5図）

調査区の南側で検出された。7号土壙と一本柱列によって切られている。

〔平面形・方向〕東西長、南北長がそれぞれ4mを計る正方形のプランを呈し、床面積が約16㎡である。南西角寄りの西壁が190cm幅で30cm程張り出している。西壁で方向を計ると磁北に対してN－20°－Wである。カマドの施設はなく、炉の存在も確認できなかった。

〔堆積土〕堆積土は細分すると6層であり、シルトと砂質シルトに分けられる。検出面からの厚さは、10cm程である。

〔壁・床面〕壁面は60°くらいの傾斜で立ち上がる。床面に貼り床はなく、地山の黄褐色砂質シルトを床にしている。北壁、東壁に周溝が巡っている。

〔柱穴〕床面でピットが4個検出された。配列関係から、この4個のピットが主柱穴となり得る。P．1－P．2は心々距離で170cm、P．3－P．4が190cm、P．2－P．3が240cm、P．1－P．4が220cmを計り、東西に長い長方形組み合わせとなる。

〔その他の遺構〕南東角で土壙1基が検出された。長径100cm、短径80cmを計り、貯蔵穴として機能していたと思われる。

〔出土遺物〕

住居内より310点の土師器片、石製品等が出土している。細片が多く、実測可能なものとしては、坏2点、坩1点、甕4点、砥石1点、石製模造品1点、石匙1点がある。

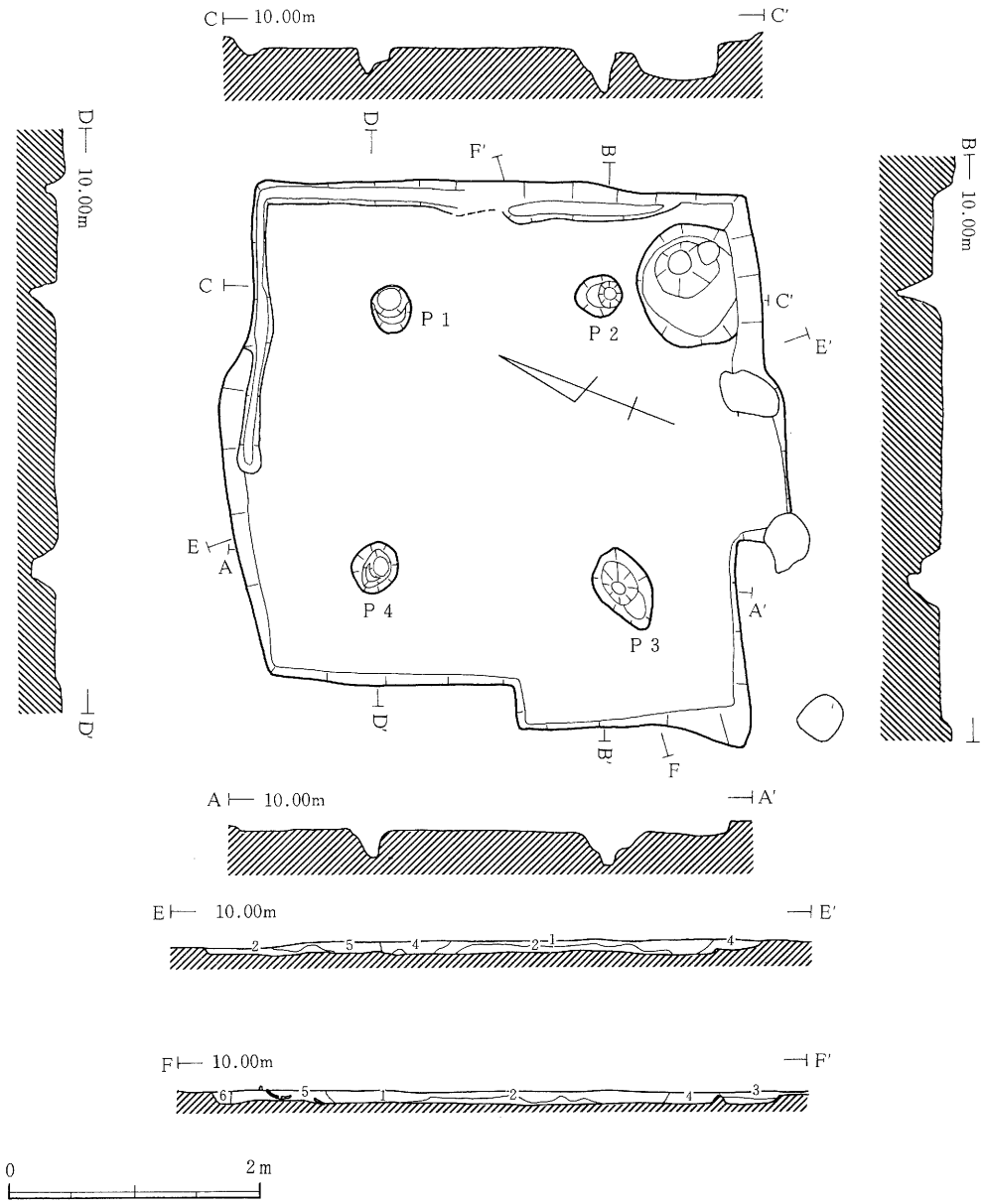
坏　（12図－3）は住居北壁沿いの東側床面より出土している。平底風の丸底で、体部は内弯しながらゆるく立ち上がり口縁部に至る。器面調整は、内外面とも磨滅が著しくて観察できない。

（12図－4）は朱塗りの坏で、住居北壁沿いのほぼ中央床面より出土している。丸底でゆるいカーブを描きながら口縁部に至る。器面調整は、外面口縁に横ナデ、体部にヘラケズリとヘラナデが施され、体部中央に「×」印のヘラキズが入れてある。内面はナデが観察される。

坩　（12図－1）は住居北東角床面より出土した。底部は丸底で、体部は「く」の字形に折れ曲がり、算盤玉形を呈する。口縁部を欠損しているため全体の器形は不明である。調整は、外面全体にヘラケズリおよびヘラミガキが施され、内面は全体的にヘラナデが行われている。

甕　（14図－8）は住居北壁沿い中央部床面より出土している。底部から体部下半にかけての破片であるが、体部の広がり具合から推測すると、かなり大型の甕になると思われる。調整は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

（14図－1）は住居東壁沿いの中央よりやや南側床面より出土した。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。器面調整は、内外面とも口縁部から頸部にかけて横ナデが施され体部は内外面ともヘラナデがなされている。最大径は、体部上半にあり、体部の径が器高よ



層No.	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 4/3にぶい黄褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む
2	2.5Y 5/2暗灰褐色に2.5Y 5/4暗灰黄色混入	砂質シルト	酸化鉄含む、炭化物少量含む
3	7.5YR 4/3褐色	シ　ル　ト	
4	7.5YR 5/4褐色に2.5Y 5/1黄灰色混入	シ　ル　ト	
5	7.5YR 5/4褐色に2.5Y 5/1黄灰色混入	砂質シルト	
6	2.5Y 5/6オリーブ褐色6.25Y 5/4黄褐色混合	砂質シルト	

5図　2号住居跡

り大きくなっている。

（15図－２）は住居内ほぼ中央床面より出土した。底部下半にかけての破片ある。底部から底径が8.6cmと小さく、底部から体部中央に向かって、ゆるい丸味をもって立ち上がっている。内面調整は、磨滅しているため不明であるが、外面は底部下半にかけて、ヘラケズリが施されている。

（13図－１）は住居北壁沿いの中央やや南よりに（14図－１）の甕の北側に並列して出土した。体部は、丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。内面調整は、器面が磨滅しているため不明であるが、体部外面はヘラケズリ後ヘラナデが施されている。最大径が体部中央にあり、体部の径が器高より大きいことが推察できる。

石製模造品（18図－１）堆積土１層中より、剣形品(?)が１点出土している。長さ4.4cm、幅2.7厚さ0.5cmを計り、表裏とも研磨されている。小孔が１ケ所穿たれ、孔径が２mmを計る。

砥石（15図－３）堆積土２層中より出土した。両面に砥磨面が観察される。特に表面中央は、溝状に磨りへった痕跡が数条走っており、刀子などを磨いたものではなく、鉄鏃のような尖頭器状のものを磨いたと思われる。

３号住居跡（６図）

調査区の北西コーナーで検出されたが、全形プランを確認するため、調査区を北側に３m×８m拡張した。しかし、プランがまだ拡張区より外に延びるため、住居跡の北西・北東角に当たる部分のみ地山面まで掘り下げて、全体の規模を把握した。４・５・６号溝に切られている。

〔平面形・方向〕東西長、南北長がそれぞれ６mを計る正方形のプランを呈し、床面積が約36㎡である。西壁で方向を計ると磁北に対してN－20°－Wである。

〔堆積土〕堆積土は細分すると11層であり、シルト、粘土質シルト、砂質シルトに分けられる。検出面からの厚さは30cm程である。

〔壁・床面〕壁はほぼ90°に立ち上がる。床に貼り床はなく、地山の黄褐色砂質シルトを床にしており、ほぼ平らである。

〔柱穴〕床面からピットが13個検出されているが、配列関係からＰ．１、Ｐ．２、Ｐ．３、Ｐ．４が主柱穴になり得る。心々距離でＰ．１－Ｐ．２が300cm、Ｐ．３－Ｐ．４が320cm、Ｐ．２－Ｐ．３が300cm、P.１－P.４が320cmを計り、ほぼ正方形の組み合わせ関係になっている。

〔カマド〕住居東辺の中央やや南に偏した位置に設置されている。天井部はなく、シルトで築かれた両袖の基底部だけが残存している。

右袖部は、長さ100cm、幅30cm、高さ10cm、左袖部は、長さ105cm、幅20cm、高さ10cmを計る。

内壁面は焼けて赤変しており、焚口部および前庭部には焼土、木炭が黒褐色シルトに、大量に混入して広がっている。内部の左袖寄りに、土師器の高坏が坏部を欠損した状態で発見された。この高坏は、朱塗りの高坏で、焚口部に面している高坏の裾部の朱が消失し、脚部には煤が付着して、火の影響を受けていることから、この高坏は支脚と使用されたものと考えられる。

〔その他の施設〕南東角で土壙が1基検出された。平面形は径が80cmのほぼ円形をなし、深さ60cmを計る。貯蔵穴と思われる。

〔出土遺物〕

住居跡内より土師器514点、須恵器1点、16点の石器剝片等が出土しており、住居跡中では出土遺物が最も多い。このうちカマド内より高坏1点、甕2点が出土し、カマド周辺の床面より坏4点、壺1点が出土している。

坏　(12図－8)はカマド焚口部床面より出土した。丸底で、体部は底部から丸味をもって内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は内傾する。外面口縁は横位のヘラミガキ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面口縁は横ナデ、底部から体部、口縁部にかけて、放射状のヘラミガキが行われている。

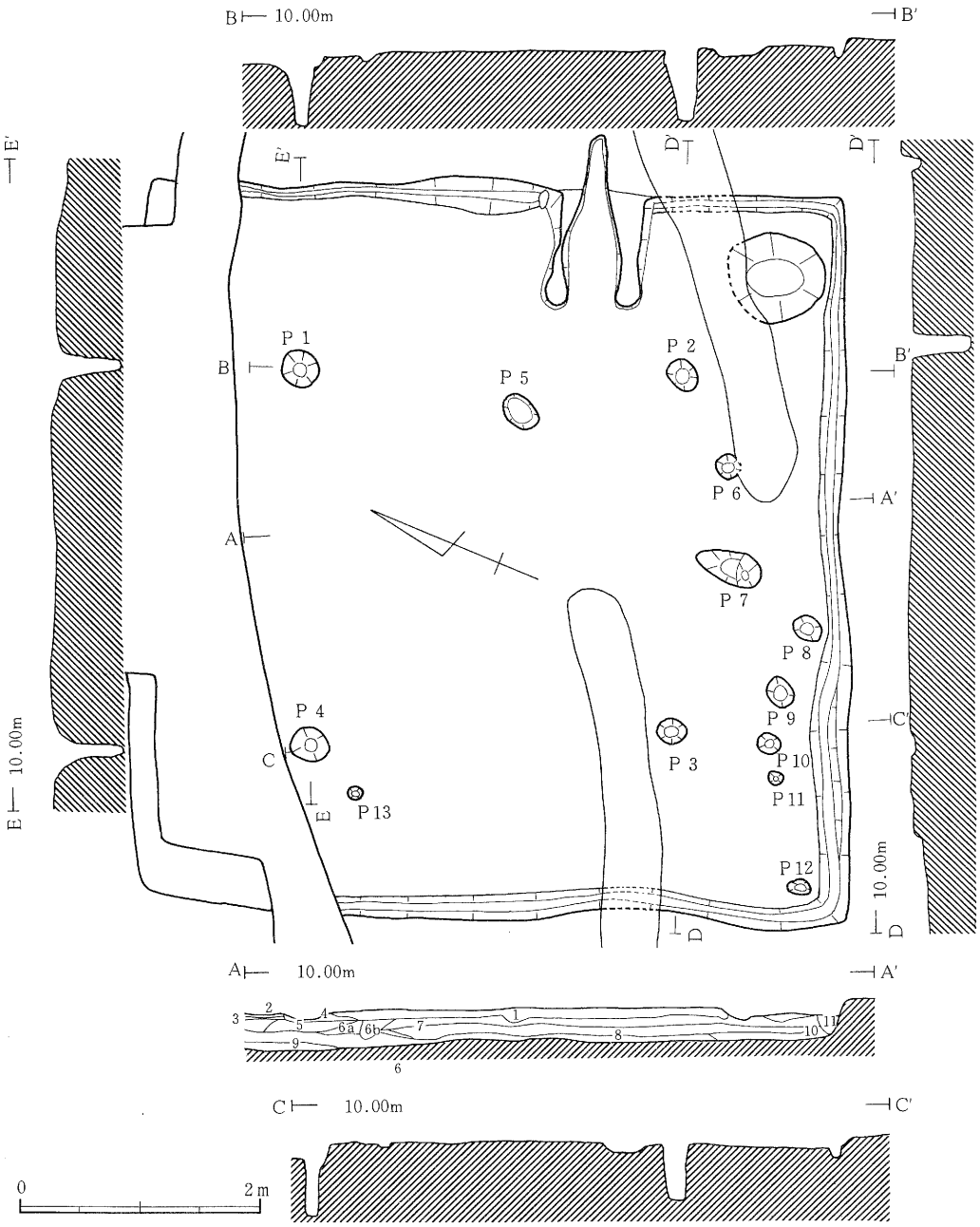
(12図－6)は住居東側南壁で出土した。丸底で、体部は丸味をもって内弯ぎみに立ち上がり、口縁部はやや内傾して直立する。外面口縁は、ミガキ後横ナデが施され、体部から底部にかけては、ヘラナデ後放射状のミガキがなされている。

(12図－7)はカマド焚口部床面より出土した。平底風の丸底になっており、底部に当たる部分が丸くくぼんでいる。底部から内弯するカーブを描きながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に短く外反する。調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部が内面にヘラケズリ、ヘラミガキ、外面にヘラケズリ、ヘラナデが施されている。

(12図－2)は底部から体部下端にかけての破片で、堆積土1層中より出土した。平底風の丸底で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

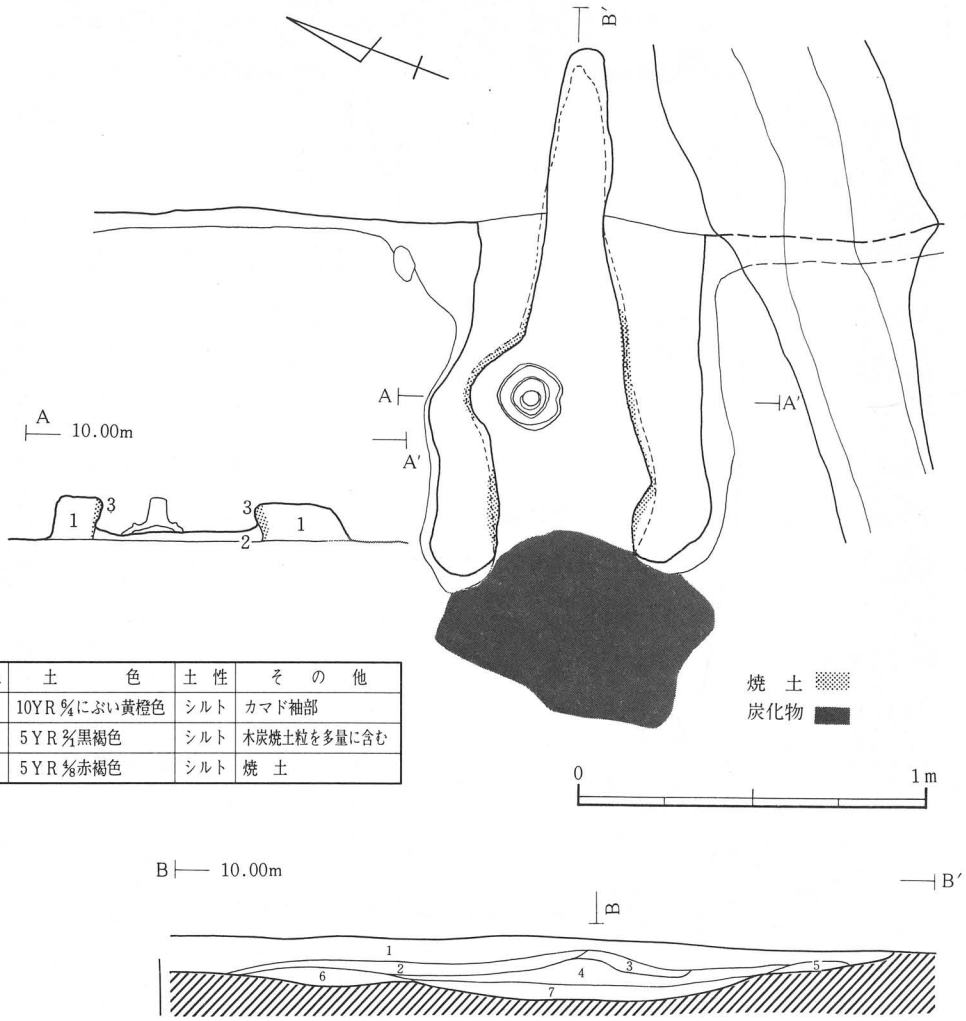
高坏　(12図－11)はカマド内の左袖寄りの位置で(14図－2、4)の甕と共伴して出土し、支脚として使用されたものと思われる。坏部を欠損しており、柱状部の片面は、中央でわずかに膨らみをもっているが、もう一方は広がりをもっている。裾部は「く」の字状に開き、中央に高さ2㎜の段を有し、さらに下方がやや開きながら基底部に至っている。柱状部は、内外面にヘラナデが施され、裾部は内外面に横ナデ調整がなされている。また器面には朱が塗られているが、火の影響を受けているため、約½しか朱は残存していない。

壺(15図－1)はカマド左袖部の北側より出土した。体部は球形で、口縁部は外傾している。器面調整は、内外面とも口縁部横ナデ、体部はヘラケズリのちヘラナデが施されている。最大径は体部上半にあり、体部径＞器高と判断される。



層No.	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10TR 5/1褐灰色に10YR 7/3にぶい黄橙色混入	シ　ル　ト	
2	10YR 7/1灰白色	シ　ル　ト	
3	10YR 5/8黄褐色	粘質シルト	酸　化　層
4	10YR 5/6黄褐色	粘質シルト	
5	10YR 4/6褐色	シ　ル　ト	
6 a	10YR 7/2にぶい黄橙色	シ　ル　ト	
6 b	10YR 7/3にぶい黄橙色	シ　ル　ト	
7	10YR 5/6明黄褐色	シ　ル　ト	
8	10YR 8/2灰白色	粘質シルト	
9	10YR 5/8黄褐色	シ　ル　ト	
10	10YR 6/6明黄褐色	シ　ル　ト	
11	10YR 4/1褐灰色	砂質シルト	

6図　3号住居跡



層No.	土　　色	土 性	そ の 他
1	10YR 6/4にぶい黄橙色	シルト	カマド袖部
2	5YR 3/1黒褐色	シルト	木炭焼土粒を多量に含む
3	5YR 5/6赤褐色	シルト	焼 土

層No.	土　　色	土　色	そ　の　他
1	10YR 5/6褐色	砂質シルト	2.5Y 3/2暗灰黄の粘土を斑点状に
2	10YR 5/4褐色	粘土質シルト	2.5Y 5/2の粘土、焼土を含む
3	5YR 5/6明赤褐色	粘　土	砂を含む
4	7.5YR 3/1黒色	粘　土	砂を多く含み、若干の焼土を含む
5	10YR 5/4褐色	砂	
6	5YR 3/1黒褐色	粘土質シルト	焼土粘及び木炭を多量に含む
7	7.5YR 2/3極暗褐色	シルト	少量の木炭、焼土粒を含む

7図　3号住居跡カマド

甕　（14図－２）は口縁部から体部上半にかけての破片で、カマド内の支脚として使用された高坏の裾部上より出土している。体部上半から頚部まで内弯し、口縁部は外反している。器面調整は、内外面口縁は横ナデ、体部外面はヘラナデ、内面はヘラケズリ、ヘラナデである。

（14図－４）はカマド中央部、支脚として使用された高坏の裾部上で、横になった状態で出土した。丸底風の平底で、体部は卵形を呈す。器面調整は、内外面ともヘラケズリが施され、体部外面に一部ヘラナデが観察される。最大径は体部中央にあると考えられる。

４号住居跡（８図）

１号住居跡の東側壁で検出された。当初検出プランがはっきりせず、土壙状の遺構かと思われたが、調査区を拡張して精査した結果住居跡であることが判明した。

〔平面形・方向〕全形は不明であるが（1.6＋α）m ×（1.7＋β）m の方形プランを持つと思われる。西壁で方向を計れば、ほぼ磁北と向きを同じくする。カマド、炉の存在は不明である。

〔堆積土〕堆積土を細分すると３枚であり、暗赤褐色、赤黒色、黄褐色の砂質シルトである。検出面からの厚さは20～30cmである。

〔壁・床面〕壁は直角に立ち上がっている。床面に貼り床は見られず、多少北から南に傾斜している。南壁と西壁に周溝が見られ、幅15cm、深さ８cmを計る。

〔柱穴〕南西コーナーでピット１個を検出したが、柱の配置から考えると、西壁に寄りすぎており、主柱穴にはならない可能性が強い。

〔その他の遺構〕南西コーナーで土壙１基が検出された。長径70cm、短径60cm、深さ40cmを計り、貯蔵穴と思われる。

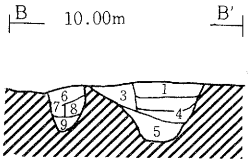
〔出土遺物〕

住居跡堆積土中より151点の土師器片が出土しているが、復元できるものは甕１点のみである。また、土壙内堆積土１層中より、坏１点、甕２点が出土している。

坏　（12図－９）はロクロ未使用の丸底の坏で、体部下半に段を有し、口縁部は外反する。器面調整は、内面に黒色処理がなされヘラミガキが施されている。外面は、底部ヘラナデ、体部に横ナデがなされている。

甕　（13図－２）は底部が平底で、体部はやや縦長の楕円形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反している。最大径は、体部中央よりわずか下方にある。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリ後一部にヘラナデが施され、内面はヘラナデがなされている。

（13図－４）は底部下半から口縁部にかけての破片である。体部は縦長の楕円形を呈し、口縁部はゆるく外反する。内面調整は不明であるが、外面は口縁部横ナデ、体部に縦位のヘラケズリが施されている。

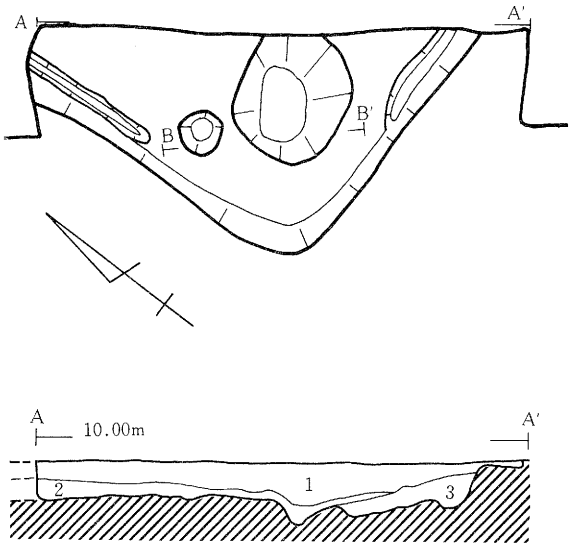


A － A ′

層No.	土　　色	土 性	そ の 他
1	2.5YR5/1暗赤灰色	砂質シルト	白色小粒子・細粒・少量の炭化物・遺物を多く含む
2	2.5YR5/1赤黒色	砂質シルト	10YR5/6の砂が混じる
3	10YR5/6黄褐色	砂質シルト	

B － B ′

1	10YR5/1褐灰色	砂質シルト	
2	7.5YR5/1褐灰色	砂質シルト	
3	10YR5/1褐灰色	砂質シルト	
4	7.5YR5/2灰褐色	砂質シルト	
5	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	
6	10YR5/1褐灰色	砂質シルト	
7	10YR5/6黄褐色	砂質シルト	
8	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
9	10YR5/1褐灰色	砂質シルト	土師器片を含む



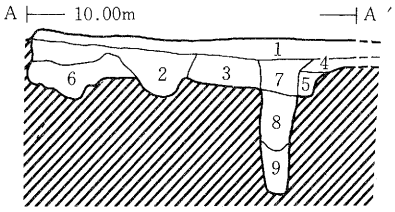
8図　4号住居跡

5号住居跡（9図）

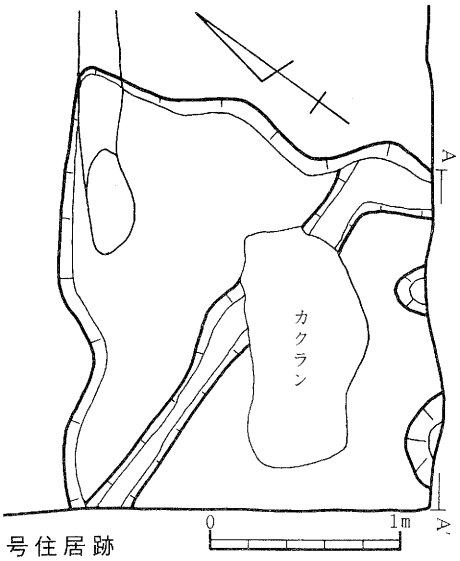
調査区の南西コーナーで検出された。

〔平面形・方向〕全形は不明であるが、(2＋α) m × (2.4＋β) m の方形プランを持つと思われる。東壁で方向を計れば、N－20°－Wである。カマド、炉の存在は不明である。

〔堆積土〕堆積土は細分すると7枚あり、砂質シルト、シルト質砂、砂に分けられる。検出面からの厚さは20～30cmである。



層No.	土　　色	土 性	そ の 他
1	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	少量の炭化物含む
2	10YR3/4暗褐色	シルト質砂	少量の炭化物・酸化鉄含む
3	10YR3/6暗褐色	砂質シルト	黄褐色の砂多く含む
4	10YR3/6暗褐色	砂質シルト	少量の炭化物含む
5	10YR5/6黄褐色に 10YR3/6暗褐色 10YR5/2灰黄褐 混合	細かい砂	
6	10YR5/4にぶい黄橙色	砂	酸化鉄含む
7	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	炭化物含む
8	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	
9	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む、骨片含



9図　5号住居跡

〔壁・床面〕東壁は直立し、少し内弯しながら立ち上がる。しかし、北壁は残存が悪く壁高は4㎝程である。

〔柱穴〕ピットは床面で2個検出されているが、東壁、北壁からの距離および南壁のセクション図よりＰ.3が柱穴と思われる。

〔出土遺物〕

住居跡堆積土中より、土師器の細片が20点出土しているが、復元できる資料は1点もない。

2．土　壙

土壙は全部で9基あり、すべて地山面で検出された。

1号土壙　1号溝の北側で検出された。長径80㎝、短径65㎝、深さ15㎝を計る浅い土壙で、堆積土は3層に分けられる。1層は灰褐色砂質シルト、2層は灰黄褐色砂質シルト、3層はにぶい黄褐色シルト質砂である。

2号土壙　長径90㎝以上、短径80㎝、深さ15㎝を計る。1号溝に切られ、8号土壙を切っている。

3号土壙　調査区の南西、2号住居の西側で検出された。長径110㎝、短径80㎝、深さ35㎝を計る。堆積土は5層に分けられ、1層は暗褐色砂質シルト、2・3層は灰黄褐色シルト質砂、4・5層にぶい黄橙色砂である。

4号土壙　1号住居跡の東側で検出された。東壁にかかっており、調査区外にプランが延びるため、全形は不明であるが長径120㎝以上、短径150㎝、深さ40㎝を計る。堆積土は3層に分かれ、1・2層はにぶい黄褐色砂質シルト、3層は灰黄褐色砂質シルトである。

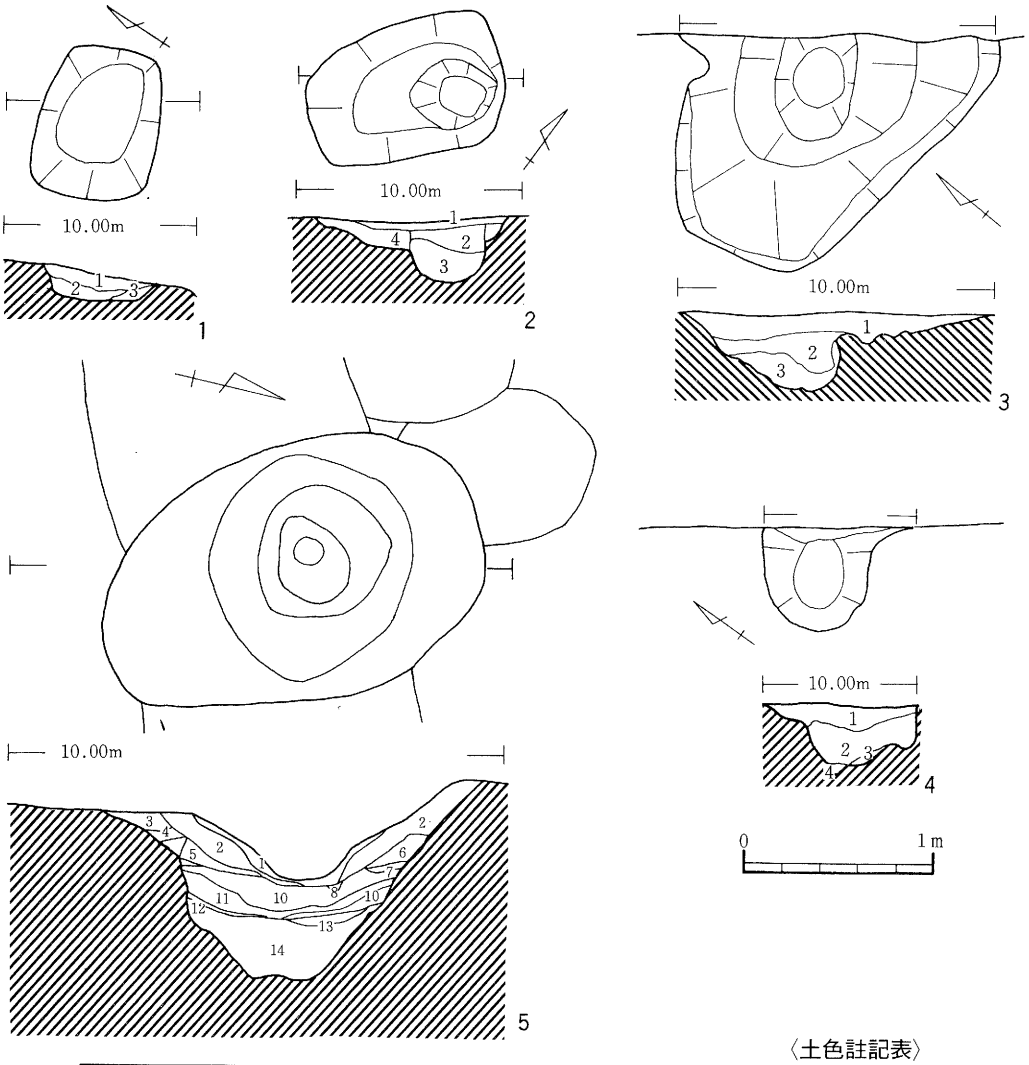
5号土壙　1号溝北側で検出された。長径90㎝、短径60㎝の不定形で深さ10㎝を計る。遺物は出土しない。

6号土壙　2号住居跡の東側で検出された。プランが調査区東側に延びるため、全体の規模は不明であるが、70㎝×60㎝以上、深さ40㎝を計る。堆積土は3層に分かれるが、いずれも黒褐色砂質シルトである。

7号土壙　調査区南側で検出された。50㎝×50㎝のほぼ円形で、深さ15㎝を計る。2号住居跡を切っている。

8号土壙　調査区南側で検出された。長径200㎝、短径150㎝、深さ100㎝を計る。堆積土は14枚あり、砂質シルト・シルト、粘土に分けられる。1号溝に切られ、9号土壙を切っている。堆積土1・2層中より弥生土器片が出土し、6層中より石製模造品が出土している。

9号土壙　1号溝と3号溝の中間で検出された。長径100㎝以上、短径80㎝、深さ17㎝を計る。堆積土は、黒褐色シルトの単層で、土師片を含む。2・8号土壙に切られている。



〈土色註記表〉

No.	遺構名	層No.	土色	土性	その他
1	1号土壙	1	7.5YR4/2灰褐色	砂質シルト	10YR5/6黄褐色土を粒状に含む
		2	10YR4/2灰黄褐色	砂質シルト	10YR5/6明黄褐色砂質シルトをブロック状に含む
		3	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質砂	
2	3号土壙	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	酸化鉄、マンガンを含む
		2	10YR4/2灰黄褐色	シルト質砂	酸化鉄、炭化物、10YR5/6黄褐色の砂をブロック状に含む
		3	10YR4/2灰黄褐色	シルト質砂	炭化物、10YR5/6黄褐色の砂を含む
		4	10YR7/4にぶい黄橙色	砂	10YR4/2灰黄褐色土、白色小粒子、酸化鉄を含む
		5	10YR7/4にぶい黄橙色	砂	マンガンをやや多く含む
3	4号土壙	1	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	マンガン、黄褐色の砂、白色小粒子を含む
		2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む
		3	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	10YR3/3黒褐色シルトをブロック状に含む
4	6号土壙	1	10YR3/3黒褐色	砂質シルト	白色小粒子を多く、部分的にマンガン粒、酸化鉄を含む
		2	10YR3/3黒褐色	砂質シルト	白色小粒子が少なく、酸化鉄を含まない。
		3	10YR3/3黒褐色	砂質シルト	10YR3/3黒褐色砂質シルトを含む
		4	10YR4/4褐色	砂質シルト	
5	5号土壙	1	7.5YR3/3暗褐色	粘質シルト	
		2	10YR4/4褐灰色	砂質シルト	
		3	10YR4/4褐色	砂質シルト	
		4	7.5YR4/4褐灰色	シルト	
		5	10YR5/6褐色	砂質シルト	
		6	10YR5/4褐灰色	砂質シルト	
		7	5YR5/4褐灰色	砂質シルト	酸化鉄を若干含む
		8	10YR5/6にぶい黄褐色	砂質シルト	
		9	7.5YR3/3黒褐	砂質シルト	
		10	10YR7/6明黄褐色	砂質シルト	
		11	10YR5/4褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄を若干含む
		12	10YR5/6明黄褐色	シルト	
		13	10YR5/4褐灰色	粘土	
		14	10YR5/4褐灰色	砂質シルト	10YR5/4褐灰色土、10YR5/6明黄褐色土をブロック状に含む

10図　土壙平面図・断面図

〔出土遺物〕

1～9号土壙の堆積土より232点の土師器片、石製品が出土している。実測可能な遺物としては、3号土壙から坏1点、高坏1点、甕1点、甑1点が、4・9号土壙から石製模造品がそれぞれ1点ずつ出土している。

坏　(12図－5)は3号土壙の堆積土1層中より出土した。平底で体部中央まで外傾しながら立ち上がり、内弯しながら頸部に至る。口縁部は、わずかに外方に引き出されている。口縁部内外面ともに横ナデ調整がなされ、体部外面は、ヘラケズリと縦位のヘラナデ、内面はヘラミガキが施されている。

高坏　(12図－10)は3号土壙堆積土1層中より出土した。坏部下方に段を有し、ゆるく内弯しながら口縁部に至る。調整は磨滅が著しいため不明である。

甕　(14図－5)は3号土壙堆積1層より出土した。底部から体部下端にかけての破片である。調整は、外面底部に横位のヘラケズリ、体部下端に縦位のヘラケズリが施され、内面にはヘラナデがなされている。

甑　(14図－7)は3号土壙堆積土1層中より出土した。口縁部の破片である。内外面とも口縁部に指による圧痕とナデ調整が観察される。

(14図－6)は3号土壙堆積土2層中より出土した。底部は無底式で、孔径7.5cmの単孔である。調整は、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

石製模造品　4号土壙の堆積土1層中(18図－5)と8号土壙の堆積土6層中(18図－3)より、それぞれ1点ずつ出土している。先端部が尖り、小孔をもつ剣形品である。前者は長さ3.8cm、幅1.45cm、厚さ0.4cm、孔径1.5mmを計り、後者は長さ4.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、孔径1.5mmを計る。

3．溝

溝は4条検出されている。検出面は、いずれも地山上面である。

1号溝　調査区の中央やや北寄りで検出された。上幅110～80cm、下幅40～50cm、深さ35～55cmを計る。横断形は「U」字形をなし、北壁はそのまま立ち上がるが、南壁は中ほどに約50cmの段を有し、内傾しながら立ち上がる。堆積土は3層に分かれ、1層はにぶい黄橙色、2層は黄褐色砂質シルト、3層は灰黄褐色砂質シルトである。方向は、N－55°－Eで調査区を横断し2号溝に切られ、1号住居跡の北西角と2号溝を切っている。西から東に向かって、緩やかに傾斜している。

2号溝　調査区の中央やや北寄りで検出された。上幅40～50cm、下幅15～20cm、深さ40cmを計り、横断形は「U」字形を呈す。方向は調査区西側からN－65°－Eへ延び、1号溝によって切られている。

3号溝　調査区北東角で検出された。上幅110cm以上、下幅50cm、深さ20cmを計り、横断形は浅い「U」字形で、北壁は調査区外へ延びている。堆積土は2層に分かれ、1層は灰色シルト、2層は暗灰黄色シルト質砂である。方向は南壁で計ると、ほぼN－90°－Eである。

4号溝　調査区の北東角、1・3号溝の中間で検出された。上幅150～70cm、下幅40～30cm、深さ25～20cmを計る。底面に凹凸はあるが、横断形は浅い「U」字形をなす。堆積土は5層に分かれ、1層は極暗赤褐色砂質シルト、2層はにぶい黄色砂、3層は灰オリーブ色砂、4層は黒褐色砂質シルト、5層は黄褐色砂質シルトである。3号住居跡を切っている。

5号溝　調査区北側で検出された。上幅40～70cm、下幅15～20cm、深さ20cmを計る浅い溝である。横断形は「U」字形を呈すが、北壁は外傾しながら立ち上がる。堆積土は2層で、1層は灰褐色シルト、2層はにぶい黄褐色シルトである。3号住居跡を切っている。

6号溝　調査区北西で検出された。上幅約45cm、下幅約25cm、深さ約15cmを計る東西に延びる浅い溝である。横断形はゆるい「U」字形を呈し、堆積土は灰褐色シルトの単層である。
3号住居跡を切り、調査区外へ延びている。

〔出土遺物〕

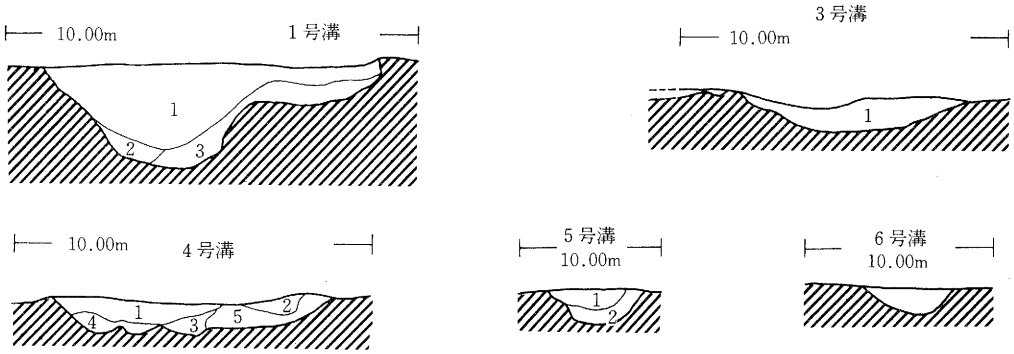
1号溝からは、堆積土1層中より石製模造品1点、高坏1点、2層中より高坏1点が出土しており、3号溝堆積土1層中より高坏1点、4号溝堆積土1層中より石製模造品1点が出土している。

高坏　(12図－12・13・15) は1・3号溝より出土している。1個体となるものはなく、すべて柱状部である。いずれも外側に広がりをもつものであるが、(12図－15) は他のものと比べて広がりの角度が大きい。調整は、外面においてヘラケズリ、横ナデが施され、内面はヘラナデがなされている。

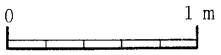
石製模造品　(18図－2・4) は1・4号構の堆積土1層中より、それぞれ1点ずつ出土している。いずれも表裏両面が研磨され、小孔を1個有している剣形品である。

4．ピット

調査区内で27個のピットが検出されている。出土遺物は、堆積土から土師器片が22点出土しているが、復元できる資料はない。27個のピットのうち、調査区の南側で東西に走るピットが7個検出されており、柱根跡が認められる。心々距離が120～130cmを計り、ほぼ一直線上に並ぶ一本柱列になる。5号住居跡の北側と2号住居跡の南側を切って延びている。



遺構	層No.	土色	土性	その他
1号溝	1	10YR5/3にぶい黄橙色	砂	
	2	2.5YR5/3黄褐色	砂質シルト	
	3	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	
3号溝	1	2.5YR5/2暗灰黄色	シルト質砂	
4号溝	1	2.5Y6/3にぶい黄色	砂	酸化鉄を多く含む
	2	5YR3/3極暗赤褐色	砂質シルト	酸化鉄を多く含む
	3	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を多く含む
	4	5Y5/2灰オリーブ色	砂	部分的に酸化鉄を多く含む
	5	10YR5/6黄褐色	砂質シルト	少量の酸化鉄を含む
5号溝	1	10YR5/2灰黄褐色	シルト	
	2	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	
6号溝	1	7.5YR5/2灰褐色	シルト	酸化鉄を含む



11図　溝断面図

V. 弥生土器

当調査区から出土した弥生土器は620片であるが、全点小破片である。そのうち、比較的保存が良く、文様がわかるもの32点について拓影と断面を掲載した(16、17図)。

1．器形から見れば、鉢、甕、壺に分類できる。高坏、蓋片が混入しているかどうかは、小破片のため判然としない。

2．文様は次のとおりである。

(a)　縄文……縄文原体は、単節縄文（LR、RL)、無節縄文（L)、撚糸文（R)、が認められた。

(b)　磨消縄文……狭義の磨消縄文と充填縄文がある。沈線で区画された区画内は、ヘラミガキが交互に行なわれている。地文及び充填された縄文はL・Rが多い。

(c)　沈線文……文様には、直線文、連続山形文、方形文、斜行沈線文、渦巻文、同心円文、連弧文、変形工字文がある。このうち方形文、同心円文、斜行沈線文は1点ずつ見られ、変形工字文については沈線が細く、典型的なものではないようである。直線文、連続山形文、連弧文は、1本施文具と2本施文具を使用したものがある。3本施文具によるものはない。口縁部内面にも1本施文具による直線文をもつものが4点あるが、外面文様が、いずれも変形工字文のものに伴う。

(d)　列点刺突文……甕の体部（LR、RL縄文）と口縁部（ヨコナデ）の境のところに施文されている。1片だけ長楕円形の列点となっている。

(e) 口縁部の形態……平口縁のものと、小突起の付くものがある。

3．以上をまとめてみると次のようである。

（第1群）　1本施文具による直線文、方形文、同心円文、渦巻文、変形工字文で、交互に磨消縄文があり、器形としては、鉢、甕がほとんどで、壺と思われるものは同心円文、渦巻文が伴うものだけである。この群と思われるものは、約½を占める。(16図－4～17)

（第2群）　甕片であり、体部にＬＲ縄文、頸部に列点刺突文をもつもの。(16図－1～3)

（第3群）　1本施文具による平行直線文で、器面がナデ、ミガキ調整されているもの。壺片と思われる。(17図－1)

（第4群）　器面がナデ、ミガキされたところに、2本施文具による直線文、連続山形文、斜行沈線文、連弧文をもつものであり、器形としては甕および壺と思われるものである。（17図－2～9、11)

（第5群）　ＬＲ縄文のみのもの。甕片と思われる。(17図－10、12～15)

その他、口縁部に小突起がつくもの（16図－9)、口縁部内面に1本施文具による沈線をもつもの（16図－4～7）は第1群に包含される。

第1群と第2群は桝形囲式、第3群は円田式、第4群は十三塚（桜井）式に、ほぼ該当できるものと思う。第5群のものについては該当型式不明である。1本施文具による沈線は2本施文具による沈線より、沈線の広いものがあるが、多くは2本施文具のそれと大差がない。

ここでは、磨消縄文と列点刺突文の見られるものを桝形囲として把えておいたが、変形工字文が典型的なものではないように見られることなどから、桝形囲式でも末期的なものと考えられる。また3本施文具による沈線文が見られないことから、下限は十三塚（桜井）式前半と考えておきたい。

Ⅵ．まとめと考察

今回の調査を実施した箇所は、埋蔵文化財包蔵地として登録されている。南小泉遺跡のわずか一画にすぎない。しかも調査面積が狭かった割には、竪穴住居跡5軒、土壙9基、溝跡6条一本柱列が1列と、遺構密度が高かった。

整理に際し、今回の調査で発見された遺構、遺物に対して十分な考察を行う心要があったが、時間的制約から、事実関係の記述と資料をできるだけ掲載することに努めた。

出土遺物は土師器が主体を占めており、特に2・3号住居跡からは、床面より年代決定の資料となり得る土師器が出土している。それらの器種には、坏、高坏、壺、坩、甕の5種があり、いずれも成形や調整にロクロを使用した痕跡は認められない。

このような器種の組み合わせ、および各器種と類似する土師器は、県内では仙台市南小泉遺

跡[1]、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡[2]、多賀城市山王遺跡[3]、古川市留沼遺跡[4]などから出土しているものが知られている。これらの遺跡から出土した土師器は、現時点において、いずれも南小泉式期として捉えられており、２・３号住居跡床面から出土した土師器は、上記の南小泉遺跡出土土師器、岩切鴻ノ巣遺跡出土の第Ⅱ群土器、山王遺跡出土の坏Ⅰ類ときわめて近似した特長をもつものであり、２・３号住居跡は南小泉式期に属すると思われる。

同時期の住居跡は、県内でも発見例が増加しつつあるが、住居にカマドを備えていない場合が多い。カマドを備えている同時期の例としては、上記の岩切鴻ノ巣遺跡の第１・２号住居跡だけであり、今回の調査で発見された３号住居跡は、それらと同時期の、カマドを備えた南小泉式期の竪穴住居跡の初現的なものといえる。

他の１・４・５号住居跡の床面からは、時期決定につながる遺物は出土していないが、発見された５軒の住居跡が重複関係もなく、ほぼ同間隔、同方向に位置していることから、２・３号住居跡が機能していた頃に、ひとつのまとまりをもった集落を形成していたことが推察できる。しかも、調査区のすぐ南側は霞ノ目飛行場で、飛行場拡張の際の土取りで多くの竪穴住居跡が発見されていることから考えると、かなり大規模に形成されていた集落の一部と考えることができる。

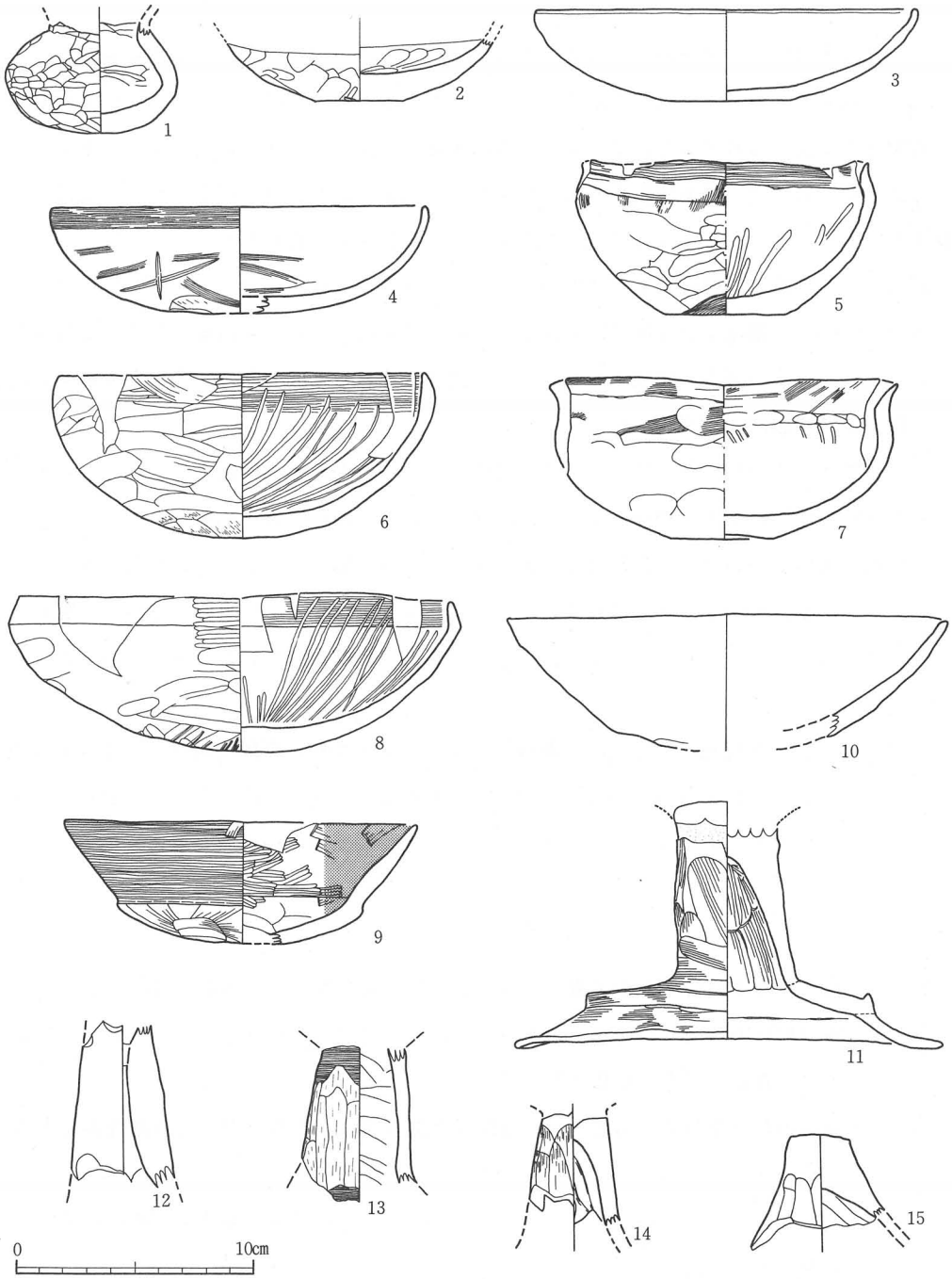
土壙、溝跡、一本柱列は、住居跡と重複関係があることから、直接住居跡と関連のある遺構とは考え難く、住居跡より新しい時期の遺構と思われる。しかし、出土している遺物は、すべて古代のものばかりであることから、住居跡とさほど時期差のない遺構と考えられる。

（１）　仙台市教育委員会「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第35集　昭和57年３月

（２）　宮城県教育委員会『岩切鴻ノ巣遺跡』宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」昭和49年３月

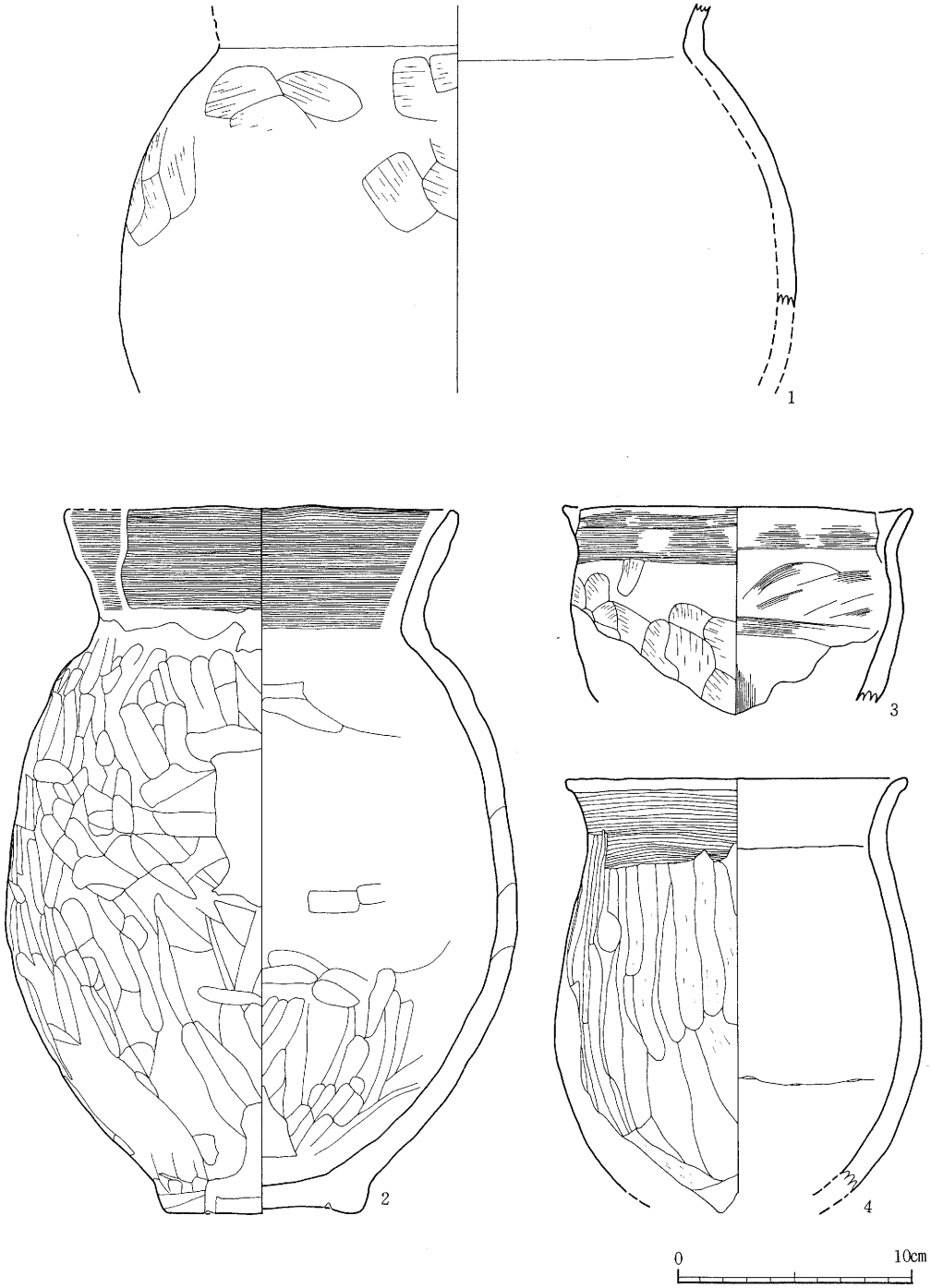
（３）　多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市文化財調査報告書第２集、昭和56年３月

（４）　宮城県教育委員会『留沼遺跡』宮城県文化財調査報告書第77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」昭和56年３月



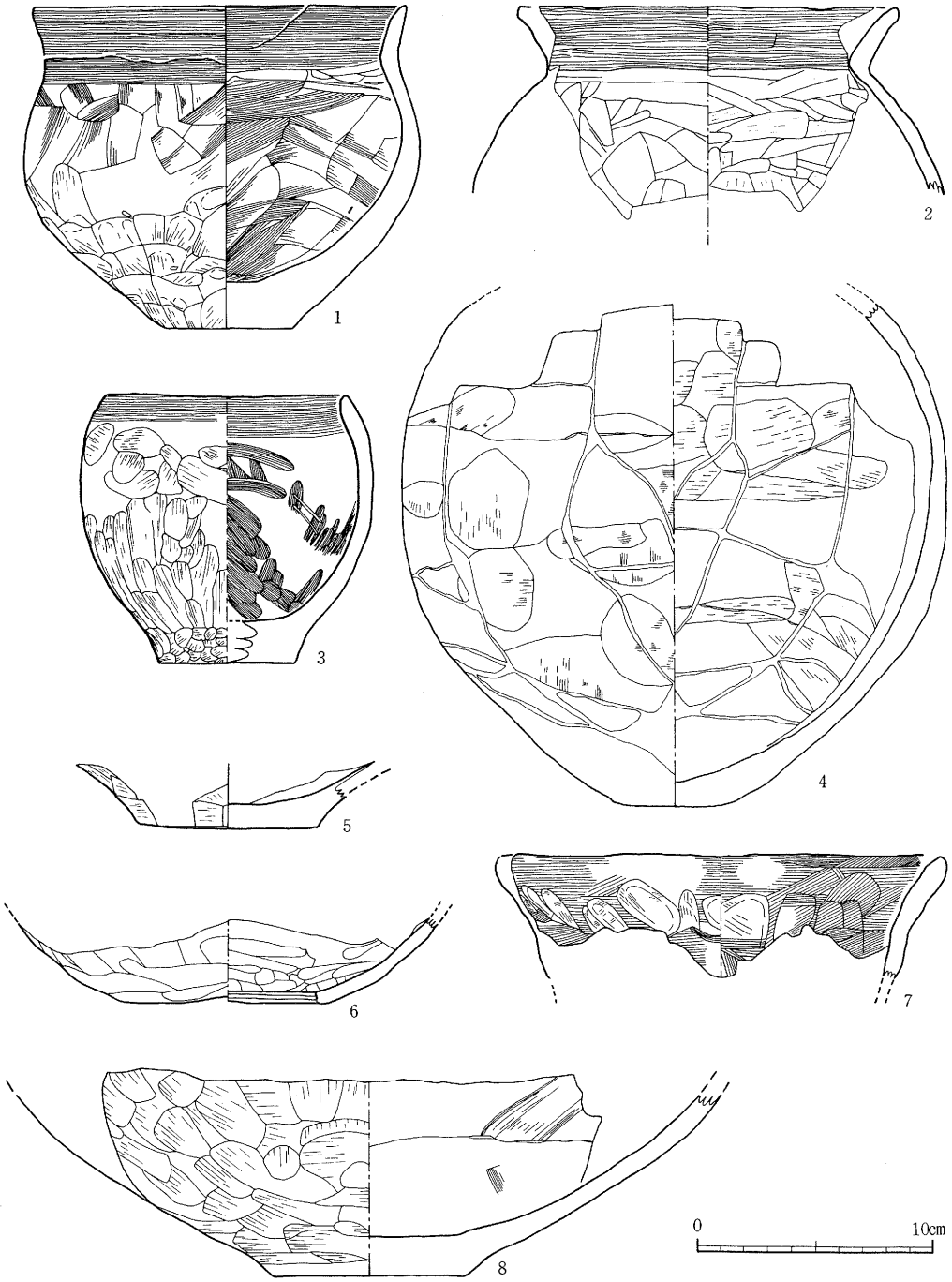
番号	遺物No.	器形	出土遺構	外面調整			内面調整			法量			写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径	
1	C−11	坩	2号住居	ヘラケズリのちミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ				30−1
2	C−15	坏	3号住居		ヘラケズリ	ヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ			3.8	
3	C−9	〃	2号住居	不明	不明	不明	不明	不明	不明	3.9	16.2		30−2
4	C−10	〃	〃	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	4.5	16.0		30−3
5	C−32	〃	3号土壙	ナデ	ケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	6.4	12.0	5.0	30−4
6	C−20	〃	3号住居	ミガキのちナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	横ナデ	ナデのちミガキ	ナデのちミガキ	6.9	15.5		30−5
7	C−21	〃	〃	ナデ	ケズリ	ケズリ	ナデ	ヘラケズリミガキ	ミガキ	6.5	14.7	4.1	30−6
8	C−22	〃	〃	ミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	横ナデ	ミガキ	ミガキ	6.7	18.2		30−7
9	C−25	〃	4号住居	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.1	14.8		30−8
10	C−38	高坏	3号土壙	不明	不明		不明	不明			18.6		30−9
11	C−19	〃	3号住居		ナデ	ヨコナデ		ナデ	ヨコナデ			18.1	30−10
12	C−35	〃	3号溝		不明			不明					
13	C−33	〃	1号溝		ヘラケズリ、ナデ			ヘラナデ					
14	C−2	〃	1号住居		ケズリ			ナデ					
15	C−34	〃	1号溝		ナデ			ナデ					

12図 土師器 (1)



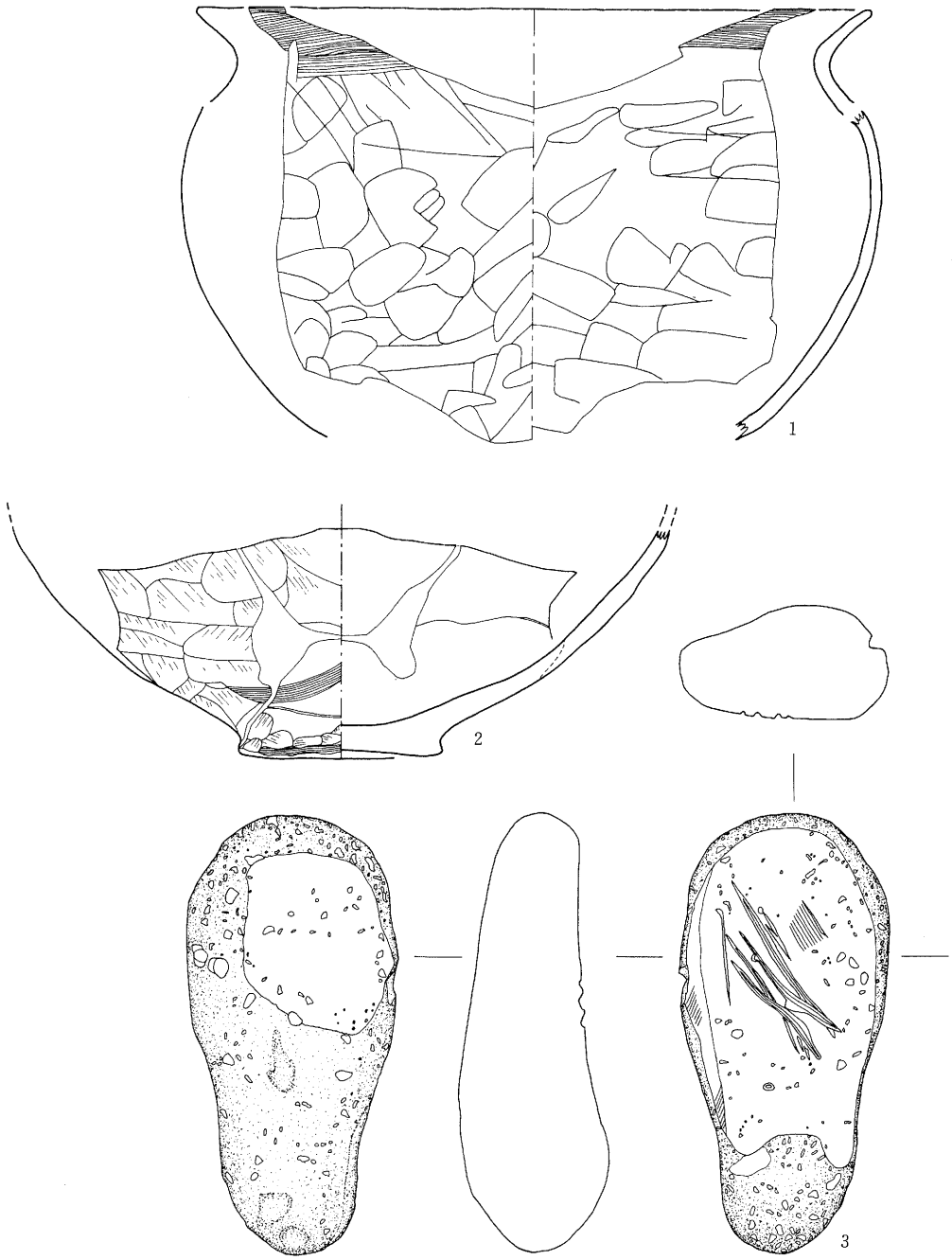
番号	遺物No.	器形	出土遺構	外面調整			内面調整			法量			写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径	
1	C－36	甕	2号住居		ヘラケズリ→ナデ			不明					31－2
2	C－26	〃	4号住居	ヨコナデ	ケズリ→ヘラナデ	ケズリ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	(33.0)	(16.5)	(8.0)	31－1
3	C－3	壺	1号住居	ヨコナデ	ヘラケズリ		ナデ	ナデ			15		
4	C－37	甕	4号住居	ヨコナデ	ケズリ		不明	不明			14.5		31－3

13図 土師器 (2)



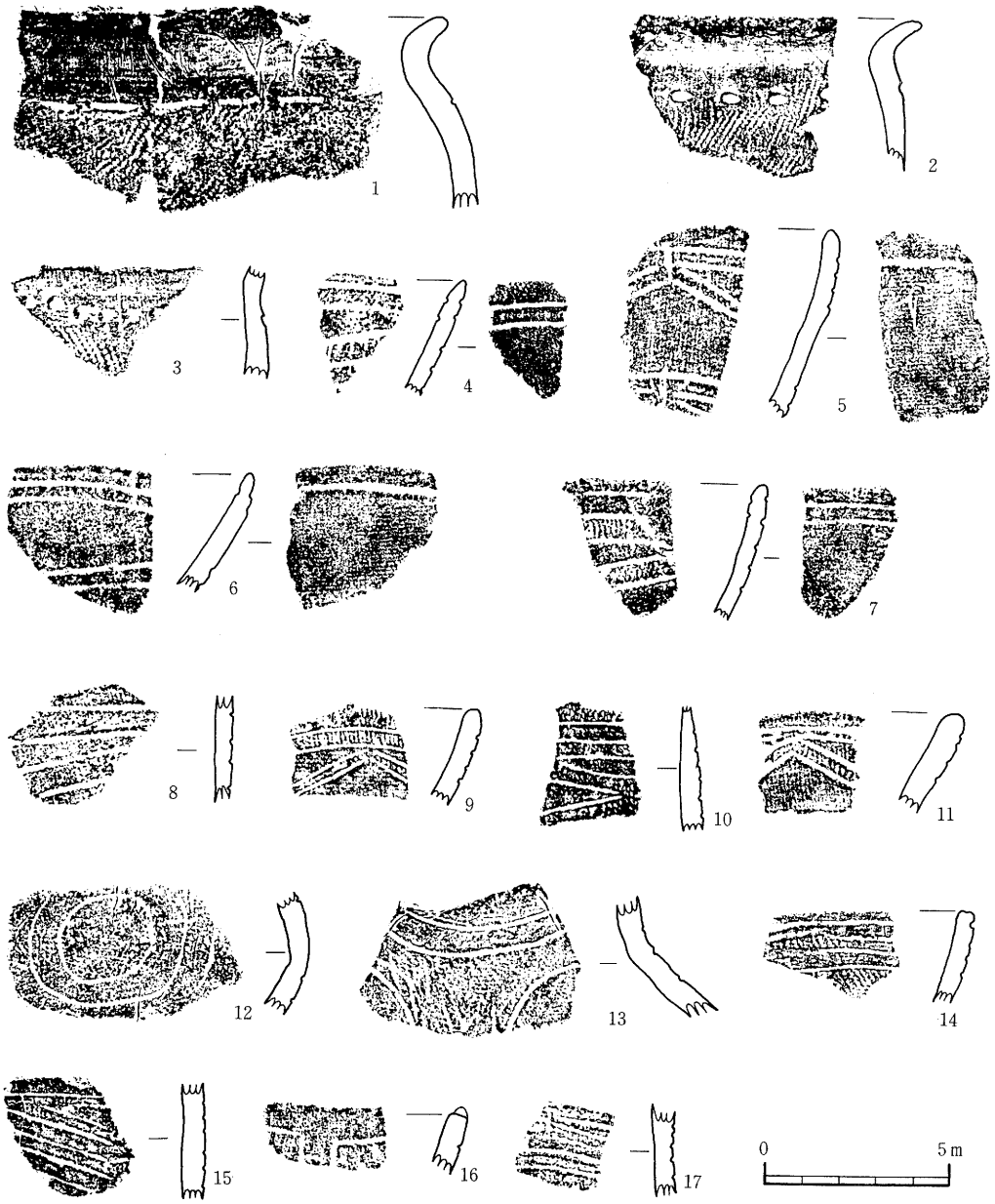
番号	遺物No.	器形	出土遺構	外面調整			内面調整			法量			写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径	
1	C—18	甕	2号住居	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	13.7	(16.0)	5.3	31—4
2	C—27	〃	3号住居	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	ヘラケズリ・ナデ		不明	16.0		31—5
3	C—8	鉢	1号住居	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ナデ	ヘラナデ	11.4	10.2	5.8	31—6
4	C—24	甕	3号住居		ナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ		ヘラケズリ	ヘラケズリ	21.3		3.7	31—7
5	C—30	〃	3号土壙		手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ	不明		7.5	
6	C—29	甑	3号土壙		ヘラケズリ	ヘラケズリ		ナデ	ナデ			8.0	32—1
7	C—31	〃	3号土壙	指おさえヨヨナデ	ナデ		指おさえヨコナデ	ナデ		不明	19.2		
8	C—13	甕	2号住居		ヘラケズリ	ヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ	不明		8.2	32—2

14図 土 師 器 (3)



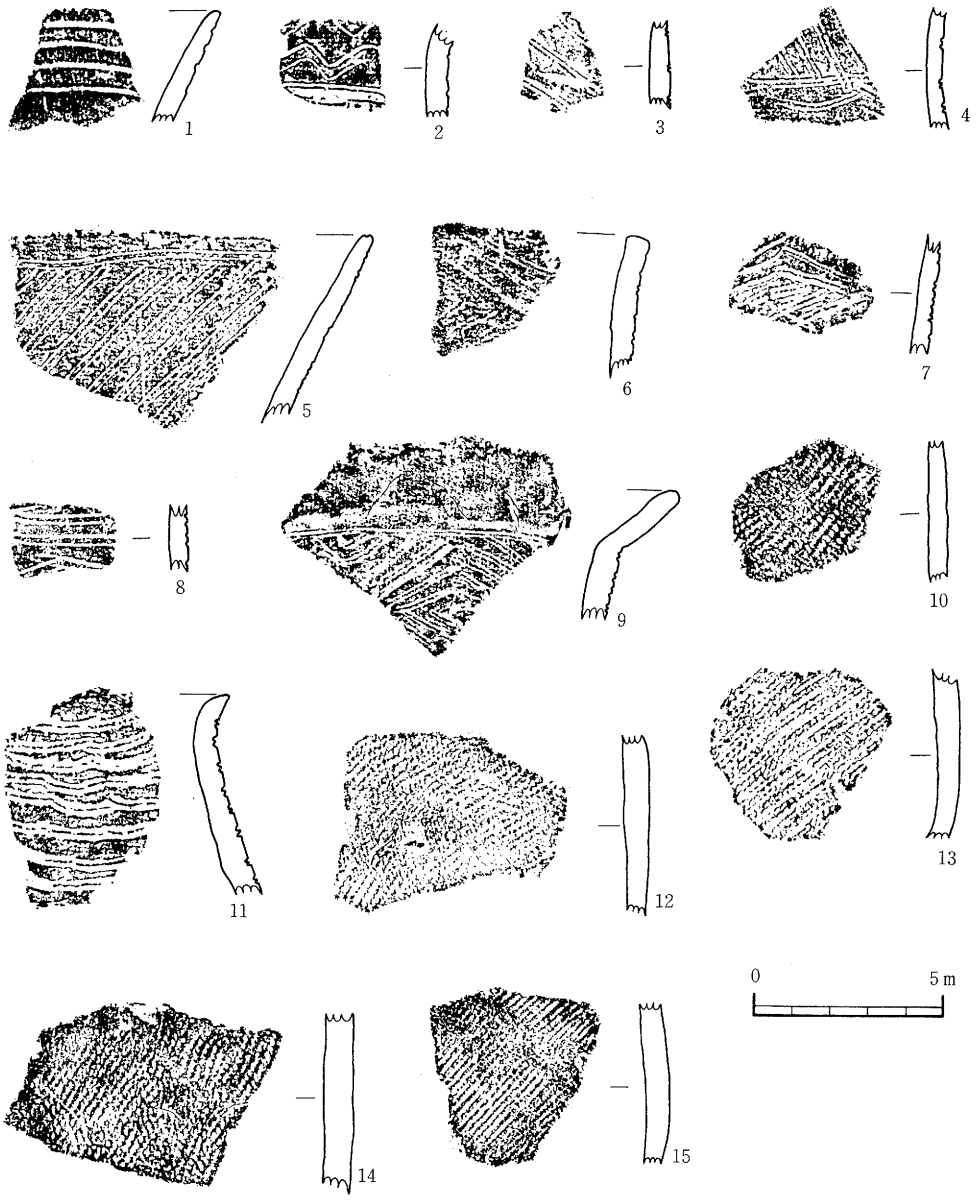
番	遺物No.	器形	出土遺構	外面調整			内面調整			法量			写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径	
1	C−28	壺	3号住居	横ナデ	ヘラケズリ→ナデ		横ナデ	ヘラケズリ→ナデ			14.2		32−3
2	C−23	甕	2号住居		ヘラケズリ	ヘラケズリ		不明	不明			8.6	32−4
3	K−1	砥石	1号住居										32−5

15図　土師器(4)・砥石



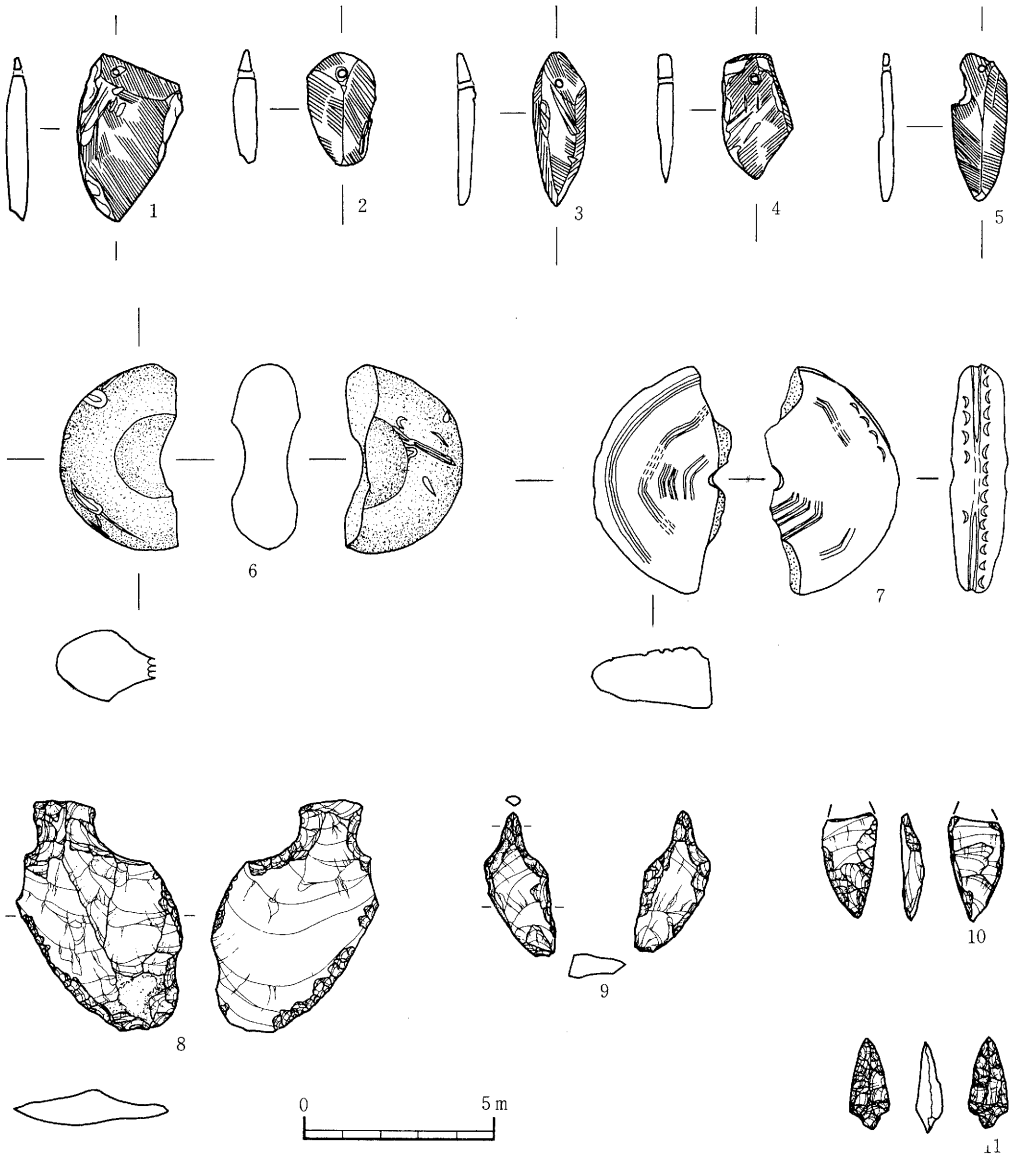
番号	遺物番号	外面 色調	外面 文様・調整	内面 色調	内面 文様・調整	器形	出土遺構	写真図版
1	B－76	灰褐	列点刺突文 LR縄文	黒褐	ナデ	甕	表土	33－1
2	B－75	褐	〃	にぶい橙	〃	〃	〃	33－2
3	B－21(1)	灰褐	列点刺突文 RL縄文	灰白	〃	〃	2住	33－3
4	B－54(1)	にぶい橙	変形工字文 磨消縄文	灰褐	平行直線文・ミガキ	鉢	5土壙	33－4
5	B－70(1)	灰褐	〃	にぶい黄褐	直線文・ミガキ	〃	表土	33－5
6	B－11(1)	にぶい褐	変形工字文	にぶい褐	直線文	〃	2住・1土壙	33－6
7	B－70(2)	黒褐	変形工字文 磨消縄文	浅黄橙	平行直線文	〃	表土	33－7
8	B－1	にぶい黄橙	変形工字文？	灰白	不明	〃	1住・1土壙	34－1
9	B－18	にぶい褐	連続山形文 磨消縄文	にぶい黄橙	ミガキ	〃	2住	34－2
10	B－54(2)	にぶい黄橙	変形工字文 磨消縄文	にぶい黄橙	ミガキ	鉢	5土壙	34－3
11	B－52	にぶい橙	連続山形文・磨消縄文	にぶい褐	不明	〃	〃	34－4
12	B－20(1)	黒褐	同心円文 〃	にぶい黄橙	ナデ	壺	2住	34－5
13	B－64	にぶい黄橙	渦巻文 〃	〃	〃	〃	6溝 ピット1	34－6
14	B－15(1)	灰褐	平行直線文 〃	にぶい橙	〃	鉢	2住	34－7
15	B－62(1)	にぶい橙	連続山形文？ 〃	〃	〃	壺	4溝	34－8
16	B－62(2)	橙	方形文・〃	橙	不明	鉢	〃	34－9
17	B－65(1)	にぶい橙	変形工字文 〃	にぶい橙	ナデ	〃	表土	34－10

16図　弥生土器拓影(1)



番号	遺物番号	外面 色調	外面 文様・調整	内面 色調	内面 文様・調整	器形	出土遺構	写真図版
1	B－5	黒褐	ナデ→平行直線文	褐灰	ナデ	甕	1住	35－1
2	B－34	にぶい橙	ナデ→連続山形文	黒褐	〃	壺	3住	35－4
3	B－21(2)	橙	ナデ→斜行沈線文	明褐灰	不明	〃	2住	35－7
4	B－20(2)	〃	ナデ→斜行沈線、連弧文	橙	〃	〃	〃	35－2
5	B－15(2)	灰褐	ナデ→斜行沈線文	黒	ナデ	甕	〃	35－8
6	B－15(3)	橙	〃	灰褐	不明	〃	〃	35－3
7	B－65(2)	〃	〃	にぶい橙	ナデ	〃	表土	35－5
8	B－61(2)	にぶい橙	ナデ→直線文・斜行沈線文	灰褐	〃	〃	2住・1土壙	35－6
9	B－11(3)	灰褐	ナデ→斜行沈線文	にぶい橙	ナデ	甕	2住・1土壙	35－9
10	B－22(1)	〃	LR縄文	橙	〃	〃	2住	36－1
11	B－9	褐灰	ナデ→連弧文	褐灰	不明	壺	2住・1土壙	36－2
12	B－46	灰白	LR縄文	灰赤	ミガキ	甕	4住	36－3
13	B－36	橙	〃	橙	ナデ	〃	3住	36－4
14	B－22(2)	にぶい黄橙	〃	〃	ミガキ	〃	2住	36－5
15	B－22(3)	灰白	〃	褐灰	〃	〃	〃	36－6

17図　弥生土器拓影(2)

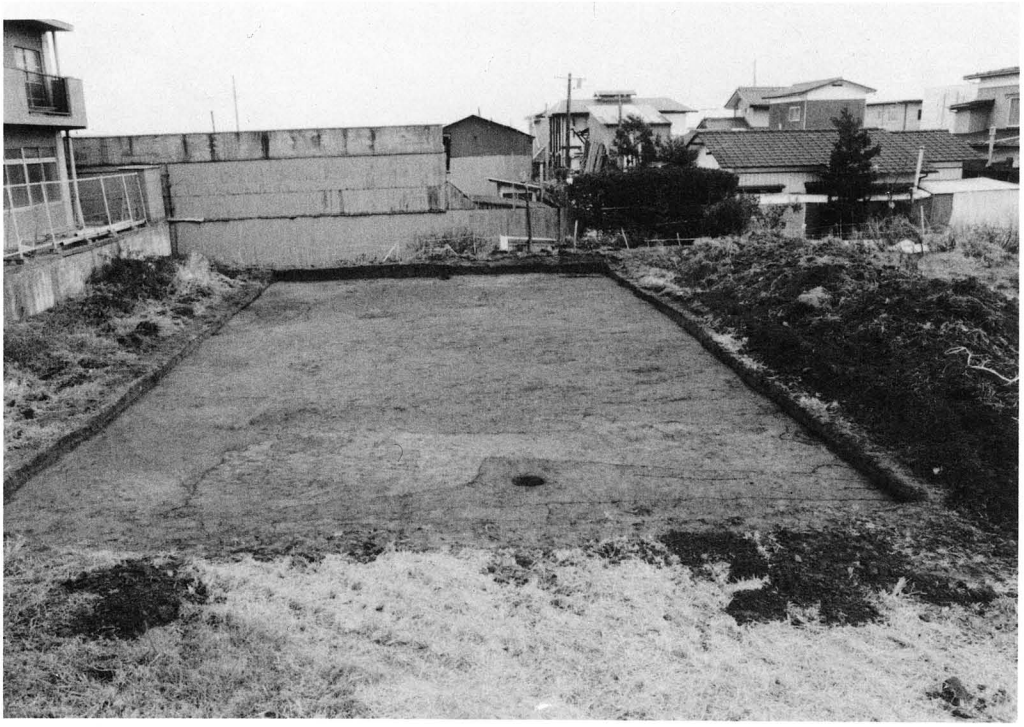


番号	遺物No.	種　別	出土遺構	備　　考	写真図版
1	K－2	石製模造品	2号住居	剣　形？	37－1
2	K－7	〃	4号溝	剣　形	37－3
3	K－13	〃	8号土壙	〃	37－2
4	K－17	〃	1号溝	〃	37－4
5	K－16	〃	4号土壙	〃	37－5
6	K－11	凹　石	3号住居		32－7
7	P－1	紡錘車	表　土	沈線文、半裁竹管文	32－6
8	K－3	石　匙	4号溝		38－3
9	K－18	石　錐	1号溝	素材は両極剥片	38－4
10	K－15	石　鏃	4号溝		38－2
11	K－14	〃	〃		38－1

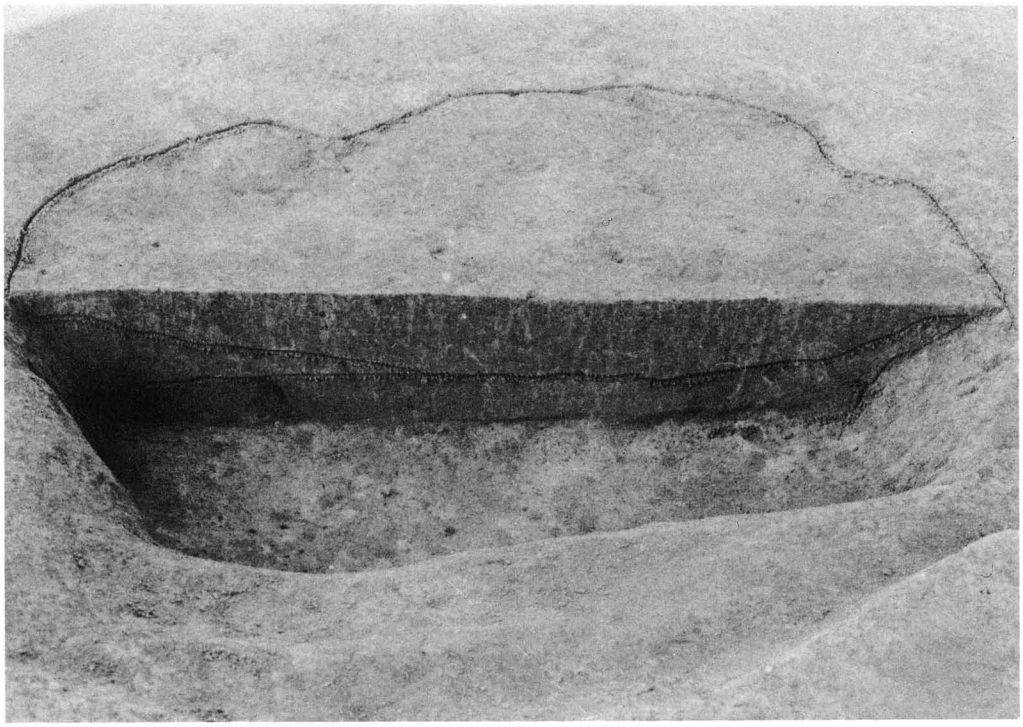
18図　石製品、土製品

図版１　調査区周辺航空写真

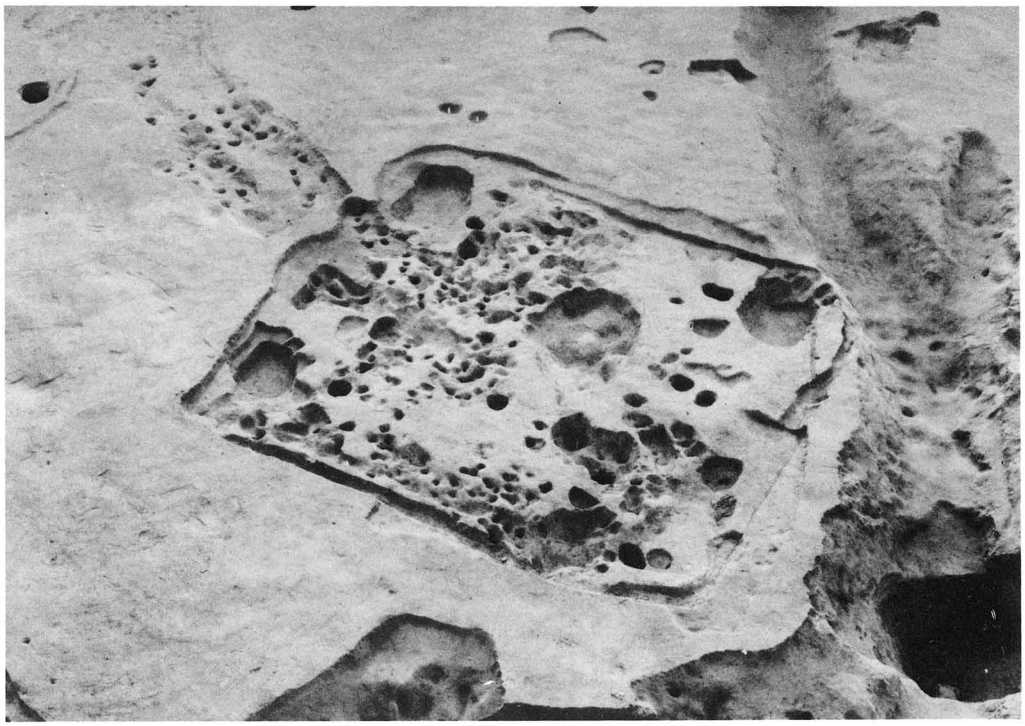
図版２　調査全風景（W→E）



図版３　調査区遺構精査全景（N →S）



図版４　１号住居跡３号土壙セクション（S →N ）

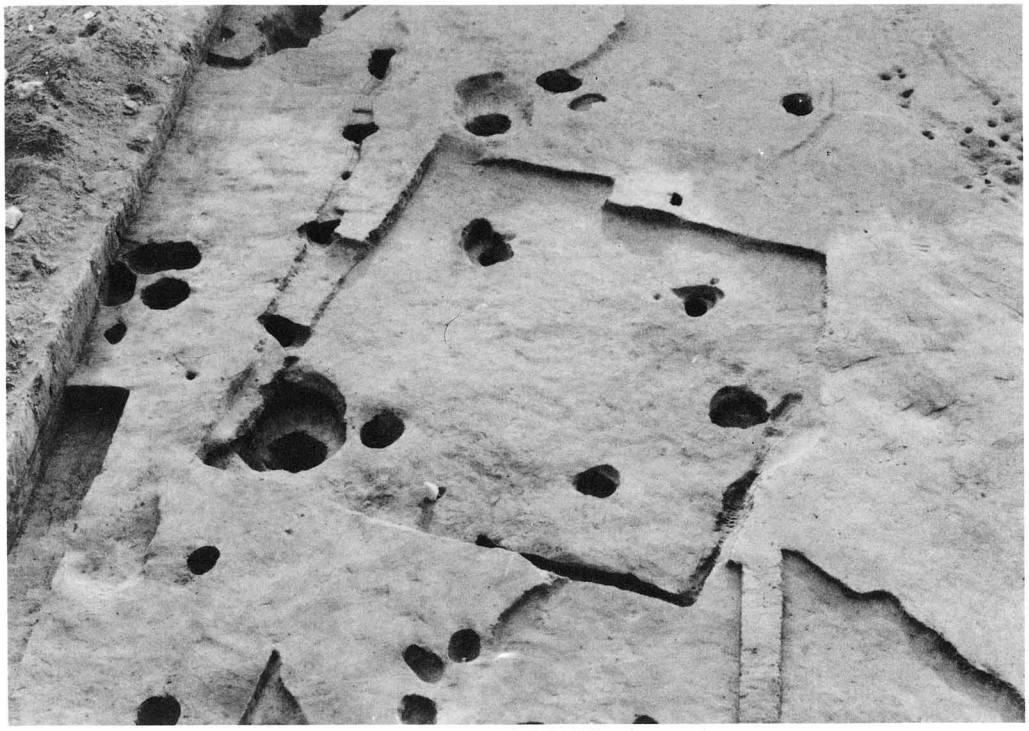


図版５　２号住居跡完掘状況（E →W）

図版６　２号住居跡遺物出土状況（W→E）

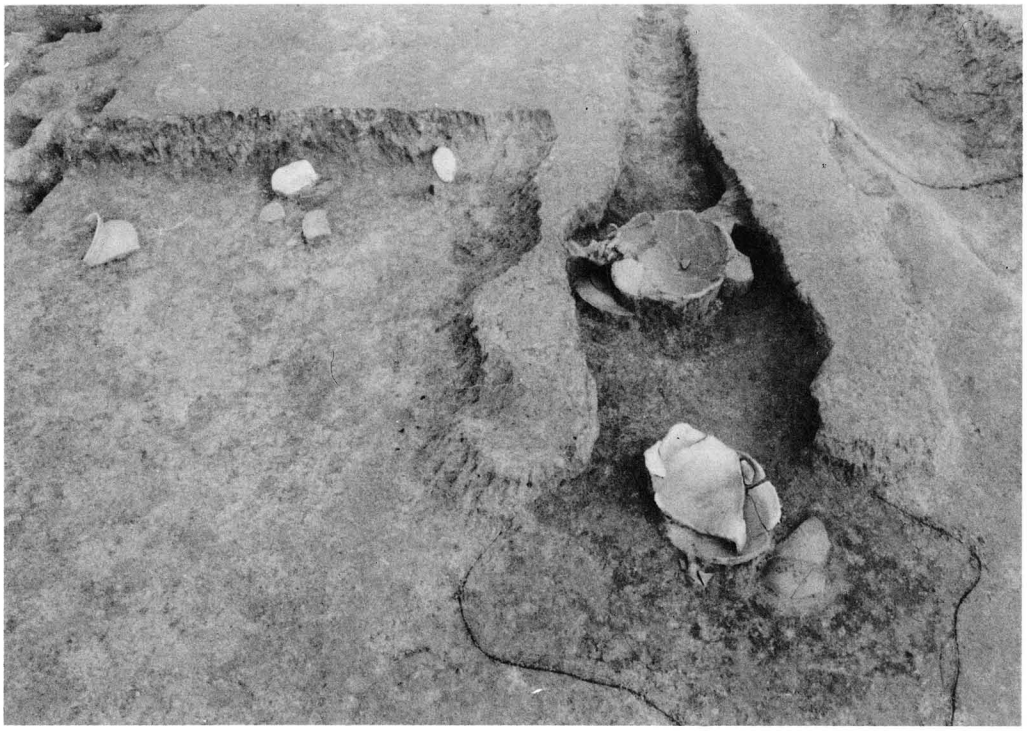
図版７　２号住居跡遺物出土状況（W→E）

図版８　２号住居跡土壙完掘状況（W→E）

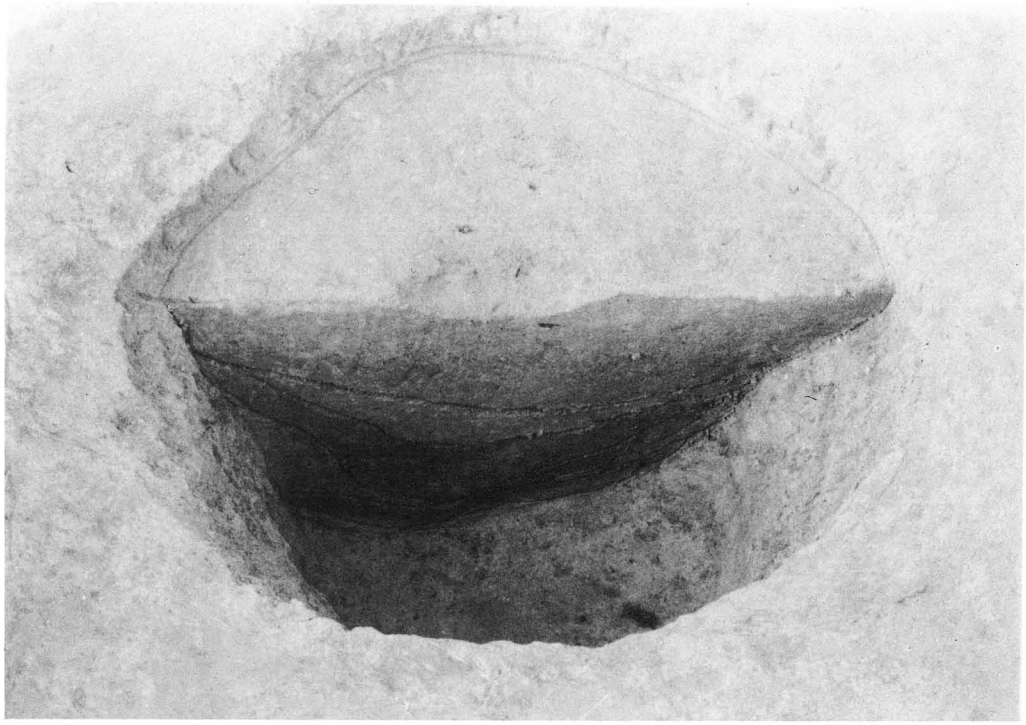


図版９　２号住居跡完掘状況（E→W）

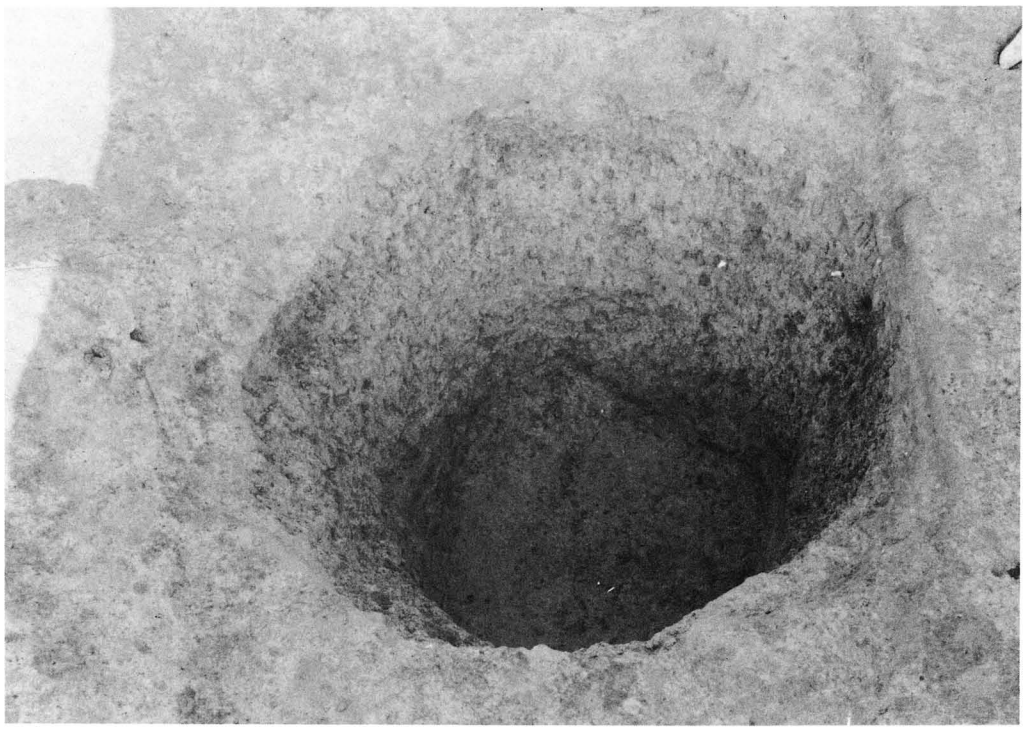
図版10　3号住居跡カマドセクション（S →N ）



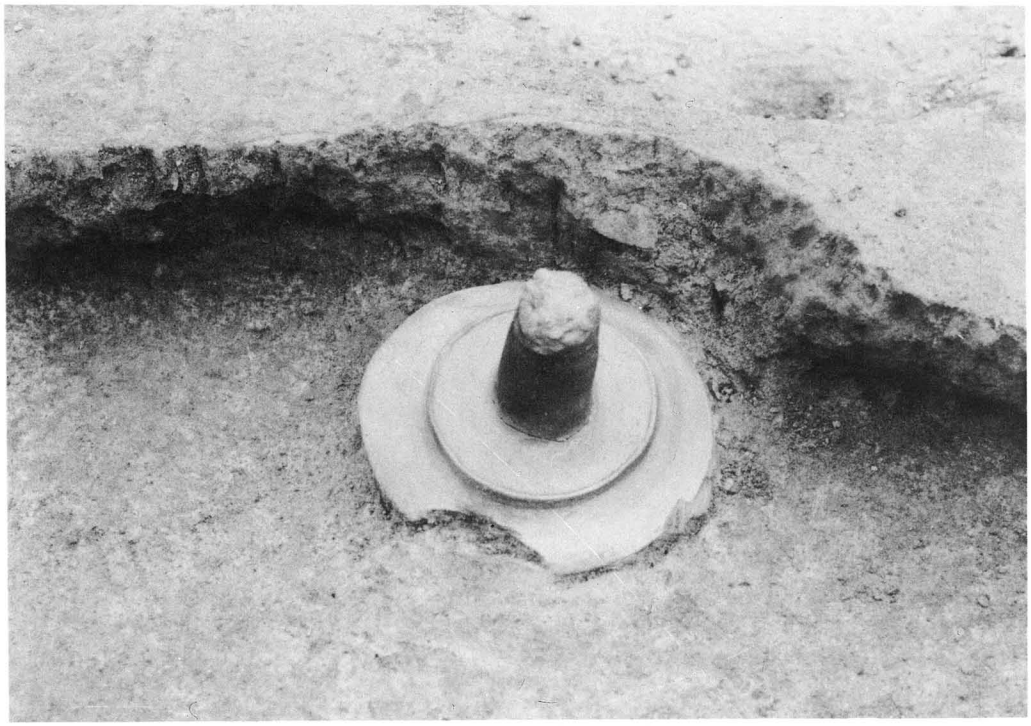
図版11　3号住居跡遺物出土状況（W→E ）



図版12　3号住居跡土壙内セクション（W→E）

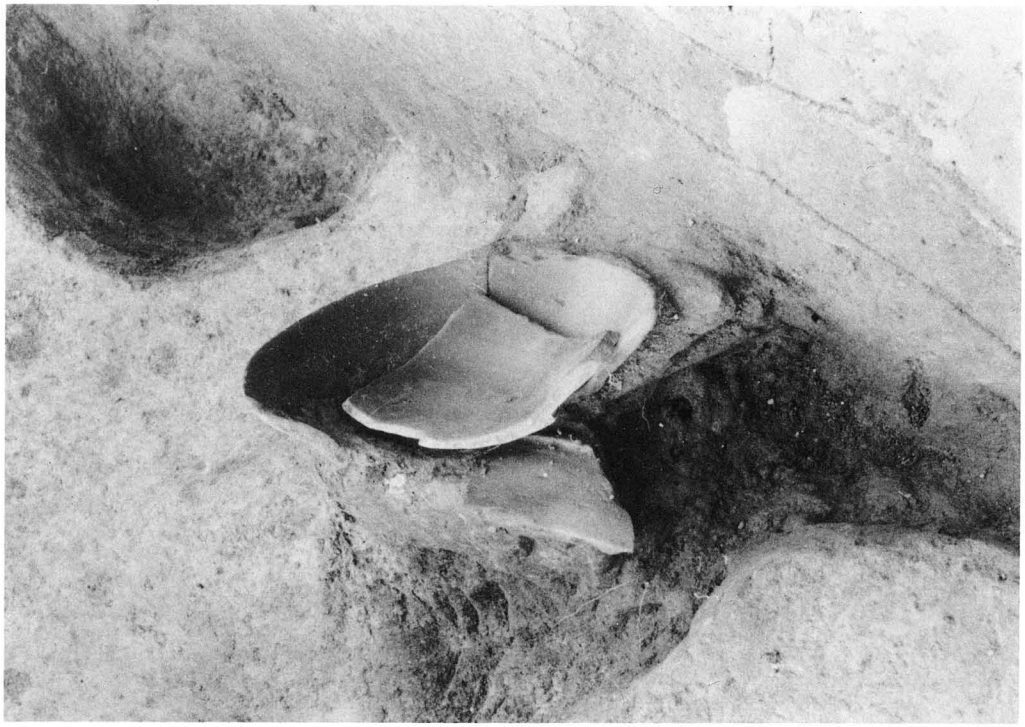


図版13　3号住居跡土壙完掘状況（W→E）



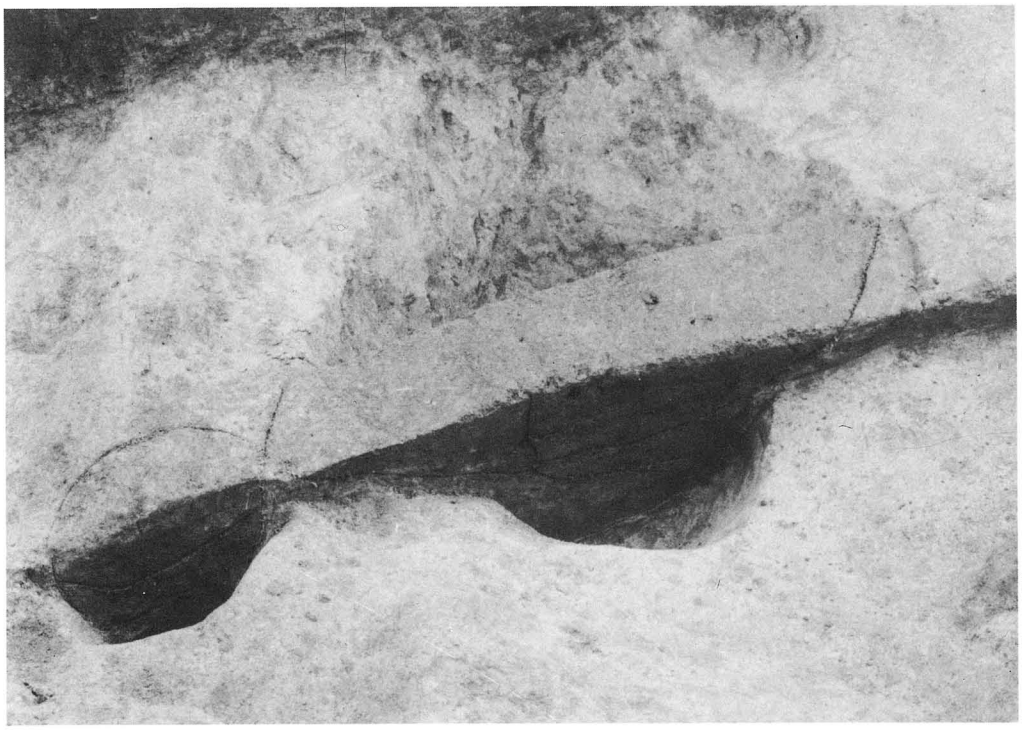
図版14　3号住居跡支脚出土状況（S →N ）

図版15　3号住居跡完掘状況（E →W）



図版16　4号住居跡土壙遺物出土状況（W→E）

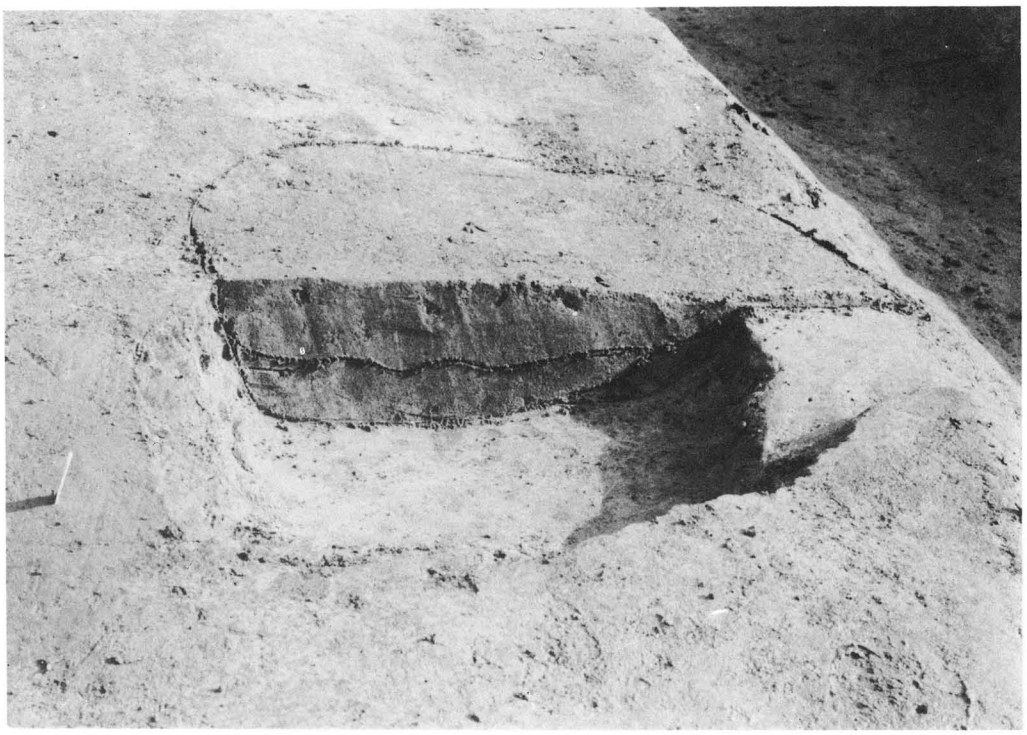
図版17　4号住居跡遺物出土状況（N→S）



図版18　4号住居跡ピット土壙セクション（W→E）

図版19　4号住居跡完掘状況（W→E）

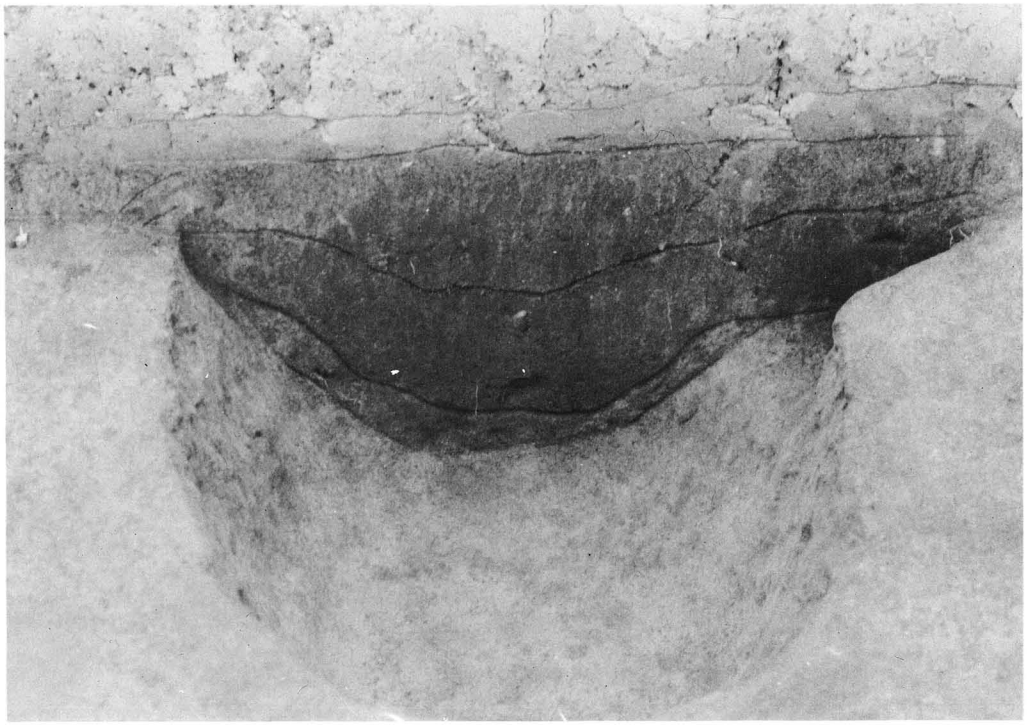
図版20　5号住居跡完掘状況（N →S ）



図版21　1号土壙セクション（W→E ）

図版22　3号土壙完掘状況（S →N ）

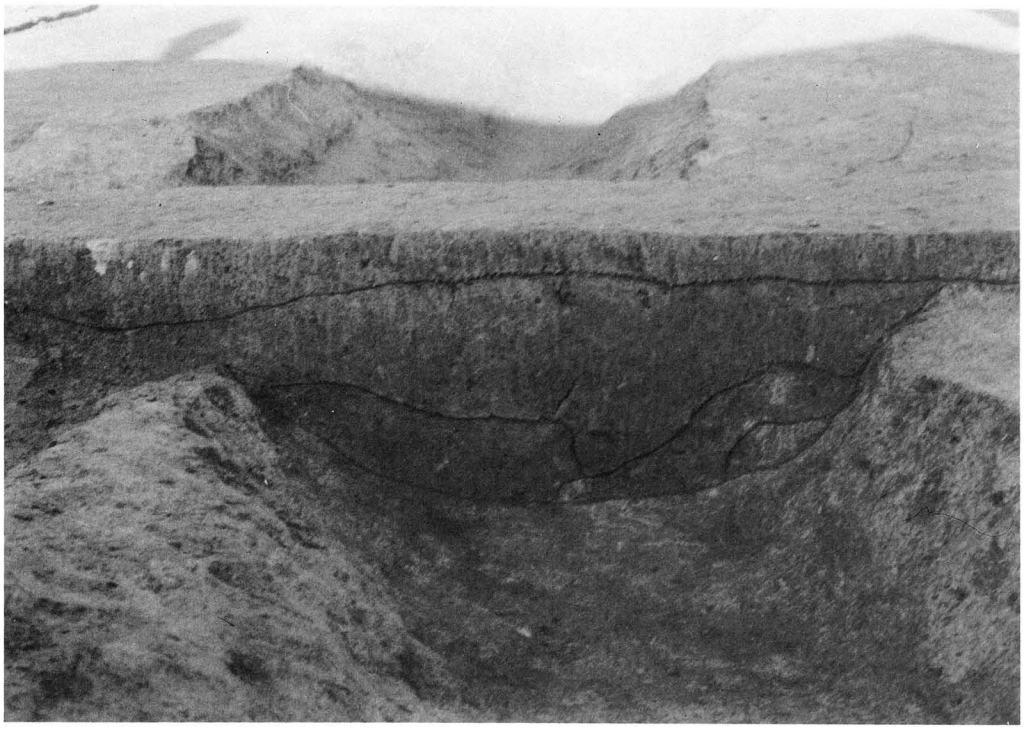
図版23　4号土壙完掘状況（W→E ）



図版24　6号土壙完掘状況（W→E）

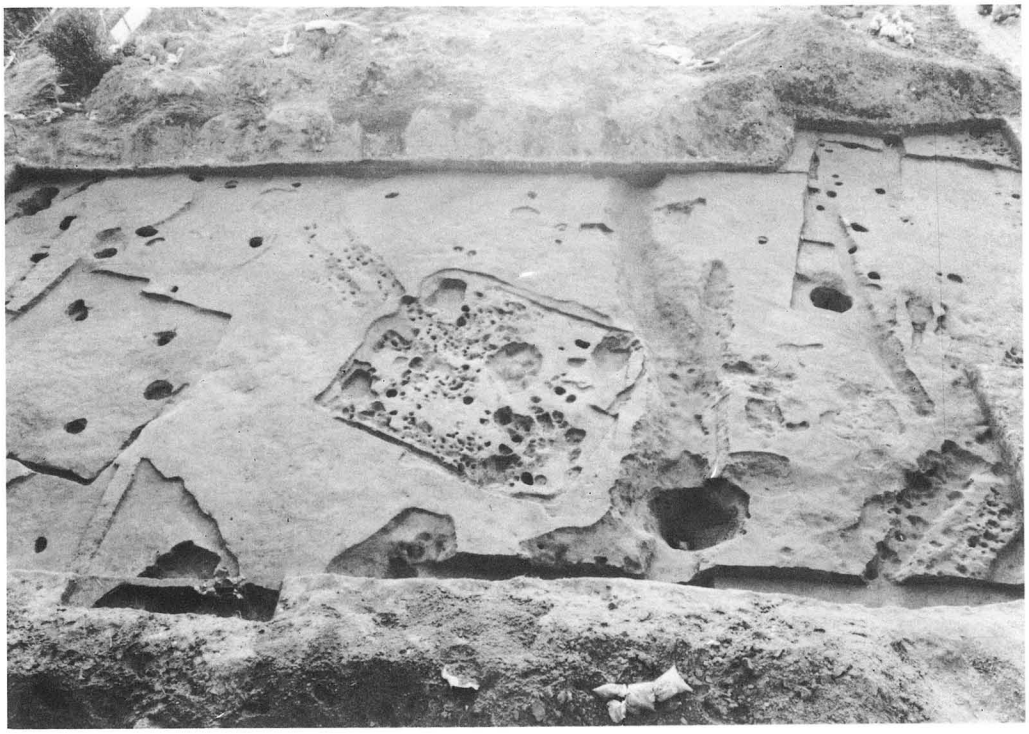
図版25　8号土壙完掘状況（S →N）

図版26　１号溝完掘状況（W→E）



図版27　１号溝セクション（W→E）

図版28　3号溝4号溝完掘状況（W→E）



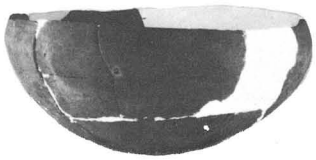
図版29　調査区完掘全景（E→W）

1

2

3

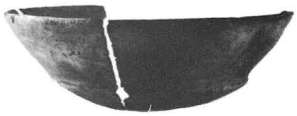
4



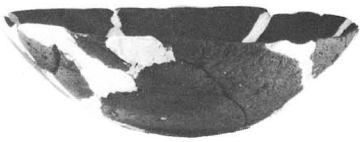
5

6

7



8



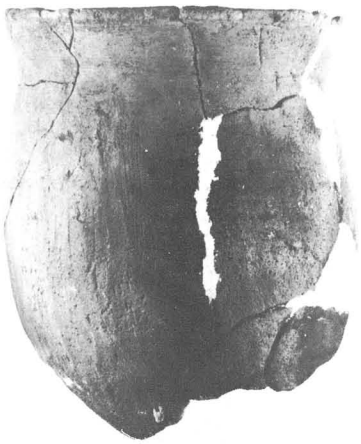
9

10

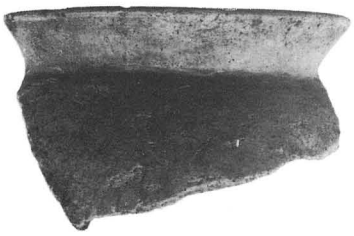
1．C－11　坩（第12図1）
2．C－ 9　坏（第12図3）
3．C－10　坏（第12図4）
4．C－32　坏（第12図5）
5．C－20　坏（第12図6）
6．C－21　坏（第12図7）
7．C－22　坏（第12図8）
8．C－25　坏（第12図9）
9．C－38　高坏（第12図10）
10．C－19　高坏（第12図11）

図版30　出土遺物（土師器）

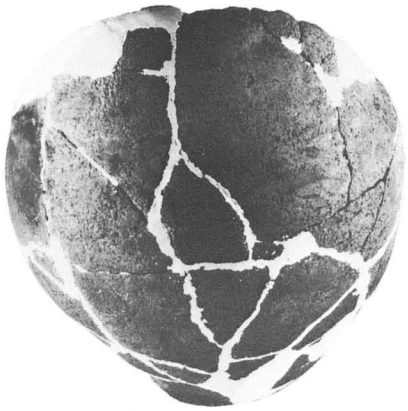
1



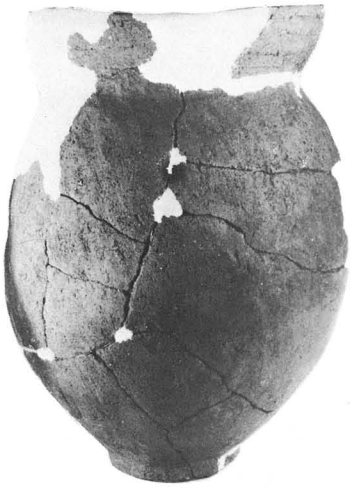
2



3



4



5

6

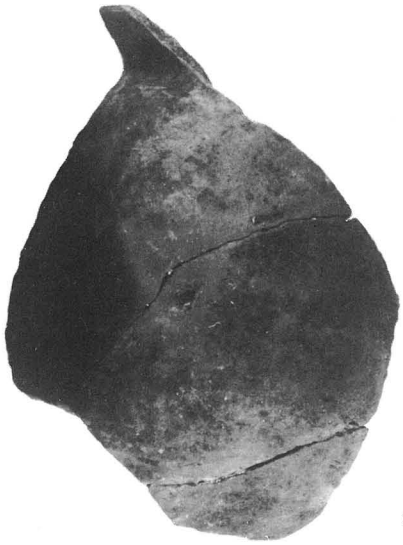
7

1．C－36　甕（第13図1）
2．C－37　甕（第13図4）
3．C－27　甕（第14図2）
4．C－24　甕（第14図4）
5．C－26　甕（第13図2）
6．C－18　甕（第14図1）
7．C－8　鉢（第14図3）

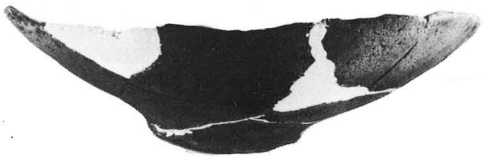
図版31　出土遺物（土師器）

1

2



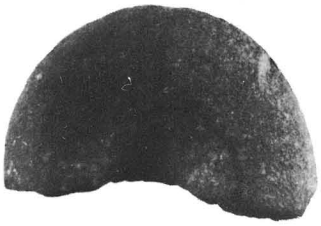
3



4

5

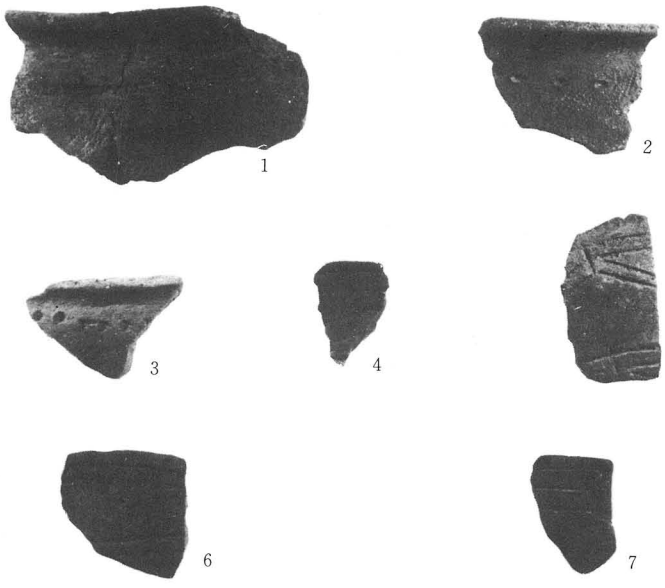
6



7

1．C－29　土師器甑（第14図６）
2．C－13　土師器甕（第14図８）
3．C－28　土師器壺（第15図１）
4．C－23　土師器甕（第15図２）
5．K－１　砥石（第15図３）
6．P－１　紡錘車（第18図７）
7．K－11　凹石（第18図６）

図版32　出土遺物（土師器・砥石・紡錘車）

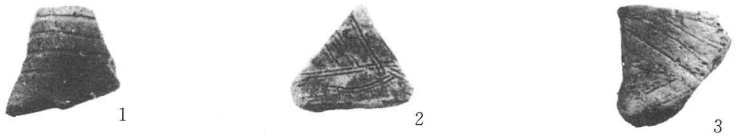


1．B－76　（第16図１）
2．B－75　（第16図２）
3．B－21(1)（第16図３）
4．B－54(1)（第16図４）
5．B－70(1)（第16図５）
6．B－11(1)（第16図６）
7．B－76(2)（第16図７）

図版33
出土遺物（弥生土器）

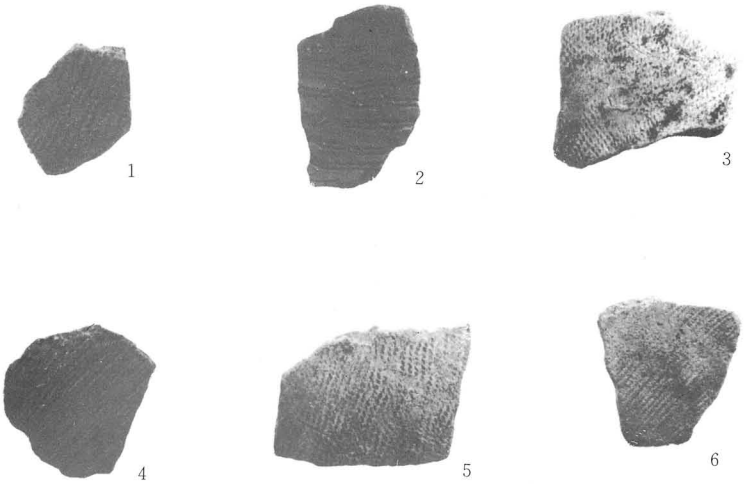
1．B－1　（第16図８）
2．B－18　（第16図９）
3．B－54(2)（第16図10）
4．B－52　（第16図11）
5．B－20(1)（第16図12）
6．B－64　（第16図13）
7．B－15(1)（第16図14）
8．B－62(1)（第16図15）
9．B－62(2)（第16図16）
10．B－65(1)（第16図17）

図版34
出土遺物（弥生土器）



1．B－5　（第17図１）
2．B－20(2)（第17図４）
3．B－15(3)（第17図６）
4．B－34　（第17図２）
5．B－65(2)（第17図７）
6．B－11(2)（第17図８）
7．B－21(2)（第17図３）
8．B－15(2)（第17図５）
9．B－11(3)（第17図９）

図版35
出土遺物（弥生土器）

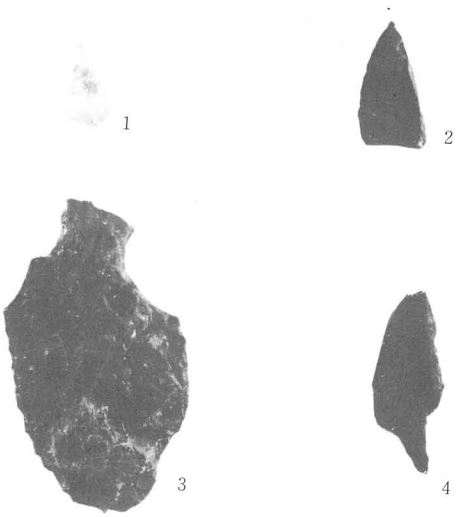


1．B－21(1)（第17図10）
2．B－9　（第17図11）
3．B－46　（第17図12）
4．B－36　（第17図13）
5．B－21(2)（第17図14）
6．B－21(3)（第17図15）

図版36
出土遺物（弥生土器）

1．K－2　（第18図1）
2．K－7　剣形（第18図3）
3．K－13　剣形（第18図2）
4．K－17　剣形（第18図4）
5．K－16　剣形（第18図5）

図版37
出土遺物（石製模造品）



1．K－14　石鏃（第18図11）
2．K－15　石鏃（第18図10）
3．K－3　石匙（第18図8）
4．K－18　石錐（第18図9）

図版38
出土遺物（石器）

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　大沢隆夫
主　事　山口　宏
〃　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　諭　佐藤　隆
〃　渡辺忠彦
〃　佐藤　裕
〃　加藤正範
主　事　田中則和
〃　結城慎一
〃　成瀬　茂
教　諭　青沼一民
主　事　柳沢みどり
〃　木村浩二
〃　篠原信彦
〃　佐藤　洋
〃　金森安孝
〃　佐藤甲二
〃　吉岡恭平
〃　工藤哲司
〃　渡部弘美
〃　主浜光朗
〃　斎野裕彦
〃　長島栄一
〃　荒井　格
派遣職員　高橋勝也
嘱　託　鈴木　実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡ー範囲確認調査報告書ー（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和53年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡ー都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ－昭和56年度発掘調査報告書－（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報－（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡ー宅地造成に伴う緊急発掘調査ー（昭和57年3月）
第43集　栗遺跡（昭和57年8月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭ー茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書ー（昭和58年3月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ－昭和57年度発掘調査概要ー（昭和58年3月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ－昭和57年度発掘調査報告書ー（昭和58年3月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集　南小泉遺跡ー都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集　南小泉遺跡ー青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）

第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－（昭和58年３月）

仙台市文化財調査報告書第60集

南　小　泉　遺　跡

昭和58年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24－24　TEL 63－1166